

【別冊】

若者ハンドブック

- ① **若手社会人の意識調査報告**
- ② **データ資料集**
- ③ **関西財界セミナーにおける若者の声**

2013年（平成25年）4月

一般社団法人 関西経済同友会
新しい日本のあり方委員会

目次

若者ハンドブック作成にあたって

P 3

① 若手社会人の意識調査報告

P 4～

1. 「暮らしや生活」について

P 6～

- Q 1. 現在の生活水準に満足していますか？
- Q 2. 将来(10～20年後)のあなたの暮らしは現在と比べてどうなると思いますか？
- Q 3. 将来のあなたの暮らしに関して、最も不安に感じることは何ですか？

2. 「仕事やキャリア」について

P 8～

- Q 4. あなたは仕事(キャリア)とプライベートのどちらを優先したいとお考えですか？
- Q 5. あなたが今よりもっとお金をかけたい(支出したい)と考えるものはなんですか？
- Q 6. 安定した収入が得られる場合、大都市圏(東京圏、大阪圏、名古屋圏)以外で働くことについてどうお考えですか？
- Q 7. 海外留学や海外赴任など、海外で働くことについてどうお考えですか？
- Q 8. 海外で働くことに関して、最も不安に感じることは何ですか？

3. 将来の「夢」や「希望」について

P 12～

- Q 9. あなたには、今、「夢」や「希望」がありますか？
- Q 10. あなたにとって「夢」や「希望」とは何ですか？

4. 日本という「国」について

P 14～

- Q 11. あなたは日本の歴史や文化について、外国人に説明する自信がありますか？
- Q 12. 日本の国が抱える課題について、日頃どの程度意識していますか？
- Q 13. 具体的にどのような国の課題を意識していますか？
- Q 14. 国際的に見ると、「日本人は、日本が好きと感じる人の割合に比べ、日本を誇りに感じる人の割合が低い」という特徴がありますが、この差が生じる要因は何だとお考えですか？
- Q 15. 他国に対して誇れる日本の強み・良さは何だと思えますか？

② データ資料集

P 18～

1. 学生時代

P 19～

- ・ 大学進学率
- ・ 海外留学者数

2. 就職活動

P 21~

- ・働くことに関する若者の不安
- ・就職内定率
- ・非正規雇用とその理由

3. 社会人

P 23~

- ・生活に対する満足度
- ・若者の意識(大切なもの、社会貢献)
- ・非正規雇用とその理由
- ・正規・非正規の年収の差・失業率
- ・老後の不安
- ・投票率
- ・SNS利用割合

4. 結婚・出産

P 28~

- ・結婚への意識
- ・結婚の障壁
- ・既婚率・未婚率・出生率
- ・専業主婦志向

③ 関西財界セミナーにおける若者の声

P 32~

1. 活かす

P 33~

- ・SNSは我々の強みだ
- ・安く買って、個性を出したい
- ・好きな分野で成長したい
- ・任せてほしい
- ・競争は嫌だ

2. 支える

P 38~

- ・リアルな体験がしたい
- ・(リアルな体験で)働くイメージを得たい
- ・失敗した時のセーフティネットがほしい
- ・社会人・経営者とつながりたい

3. 伸ばす

P 42~

- ・競争力を生む教育にしてほしい
- ・一歩先、外の世界を見たい
- ・雇用制度を新しくしてほしい
- ・就職活動制度を新しくしてほしい
- ・起業できる環境を整えてほしい

若者ハンドブック作成にあたって

この度、関西経済同友会では『自立と連携に基づく「しなやかな一流国」へ』と題する提言書をまとめた。

当提言書では、活かしきれていない日本（人）の強みや隠れた日本の強み＝「日本力」と捉えて、その活用を訴えている。そして、隠れた日本の強みの中で、特に重要なものとして、次世代を担う若者の力の活用をあげている。

現代の若者は「責任感に乏しい」「内向き志向が強い」「夢（野心）が小さい」といったマイナス面ばかりがクローズアップされることが多い。

しかし、こうした諸点も見方を変えれば、新しい日本にとってかけがえのない強みとなり得る。現代の若者が持つ（隠れた）強みや特性＝「若者力」を余すところなく活用していくことが、新しい日本にとって不可欠である。

こうした「若者力」の活用にあたっては、

- ①若者の考えや意識、価値観などを正しく理解し、これを認めた上で、若者の良さや特長を「活かす」という発想を持つ
- ②実社会の知識や経験が不足する若者に対して、就業体験などリアルな体験を得る機会を与えるなど「支える」ための取組を行う
- ③経営者や起業家との交流の機会を設けて一歩先を見せる、留学生との交流などを通じて外の世界を見せるなど、若者を「伸ばす」取組も行うことが必要である。

当ハンドブックは様々な観点から現代の若者像を映し出している。ご覧頂ければ今まで思い描いていた若者像だけでなく、新たな若者像も垣間見えるのではないだろうか。

次世代を担う若者にバトンを受け渡すことは現世代の責務である。若者にバトンを確実に受け渡すため、「若者力」を「活かす」「支える」「伸ばす」一助として、当ハンドブックを活用頂ければ幸甚である。

一般社団法人 関西経済同友会
新しい日本のあり方委員会
委員長 加藤 貞男

【若者ハンドブックの構成】

①若手社会人の意識調査報告

「暮らし・生活」「仕事・キャリア」「夢・希望」「日本という国」について、若手社会人（約2,900名）を対象に実施したアンケート調査

②データ資料集

若者関係のライフステージ別（「学生時代」「就職活動」「社会人」「結婚・出産」）各種統計データ

③関西財界セミナーにおける若者の声

2013年2月7・8日に開催された関西財界セミナー第5分科会に参加した大学生から、facebookを通じて表明された意見

①若手社会人の意識調査報告

調査概要

○調査時点

平成24年 9月～10月

○回答者数

2,874人

○回答者性別・年齢構成

(単位:名)

| | 15～19歳 | 20～24歳 | 25～29歳 | 30～35歳 | 35歳以上 | 計 |
|--------|--------------|----------------|----------------|----------------|------------------|------------------|
| 男性 (※) | 13 (0.5%) | 162 (5.6%) | 461 (16.0%) | 446 (15.5%) | 721 (25.1%) | 1,804 (62.8%) |
| 女性 | 3 (0.1%) | 157 (5.5%) | 422 (14.7%) | 206 (7.2%) | 282 (9.8%) | 1,070 (37.2%) |
| 計 | 16 (0.6%) | 319 (11.1%) | 883 (30.7%) | 652 (22.7%) | 1,003 (34.9%) | 2,874 (100%) |

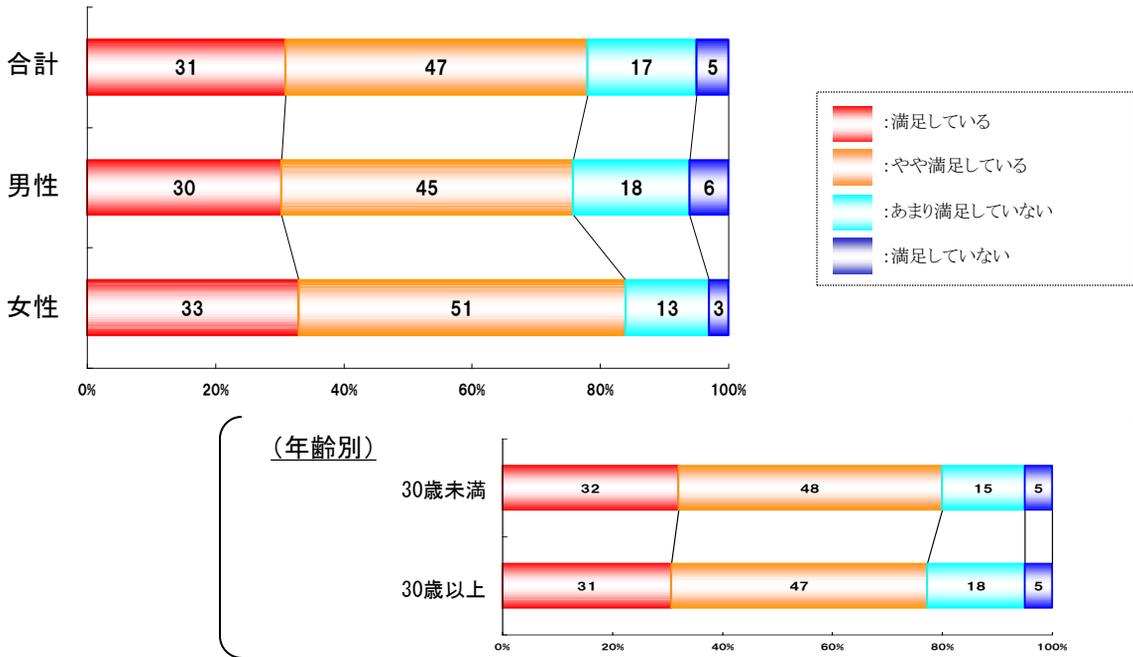
※男性1名年齢未回答

1. 「暮らしや生活」について

Q1. 現在の生活水準に満足していますか？

○「(やや)満足している」の割合は78%と非常に高い

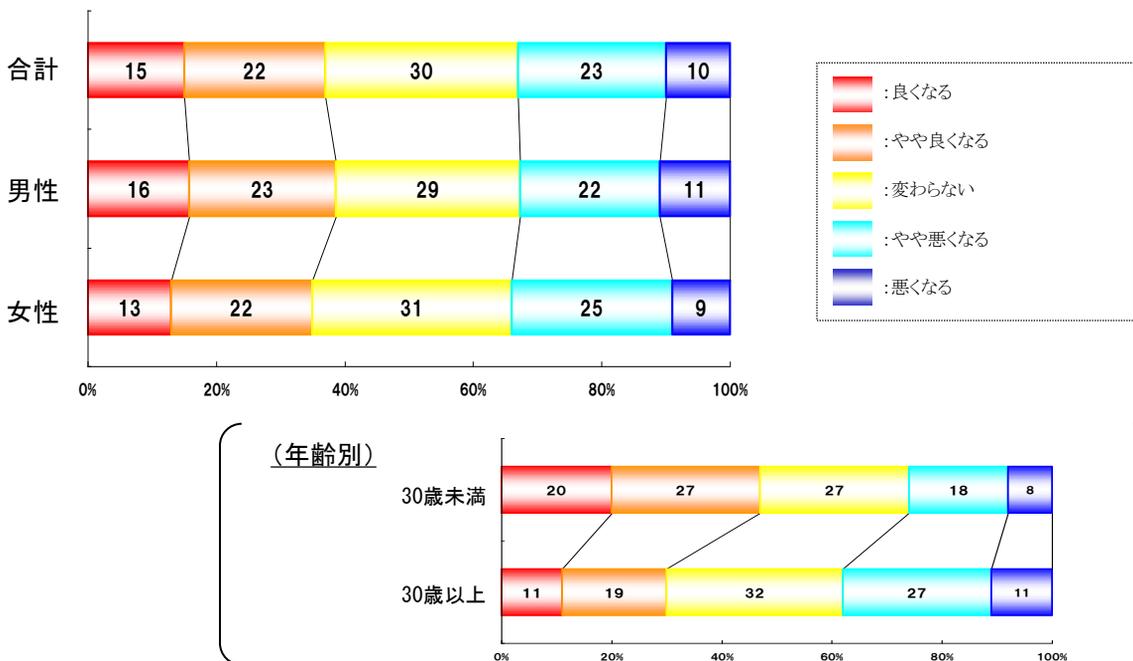
○「(やや)満足している」は「男性」(75%)に比べ、「女性」(84%)の割合が高い



Q2. 将来(10~20年後)のあなたの暮らしは現在と比べてどうなると思いますか？

○「(やや)良くなる」(37%)、「変わらない」(30%)、「(やや)悪くなる」(33%)で拮抗している

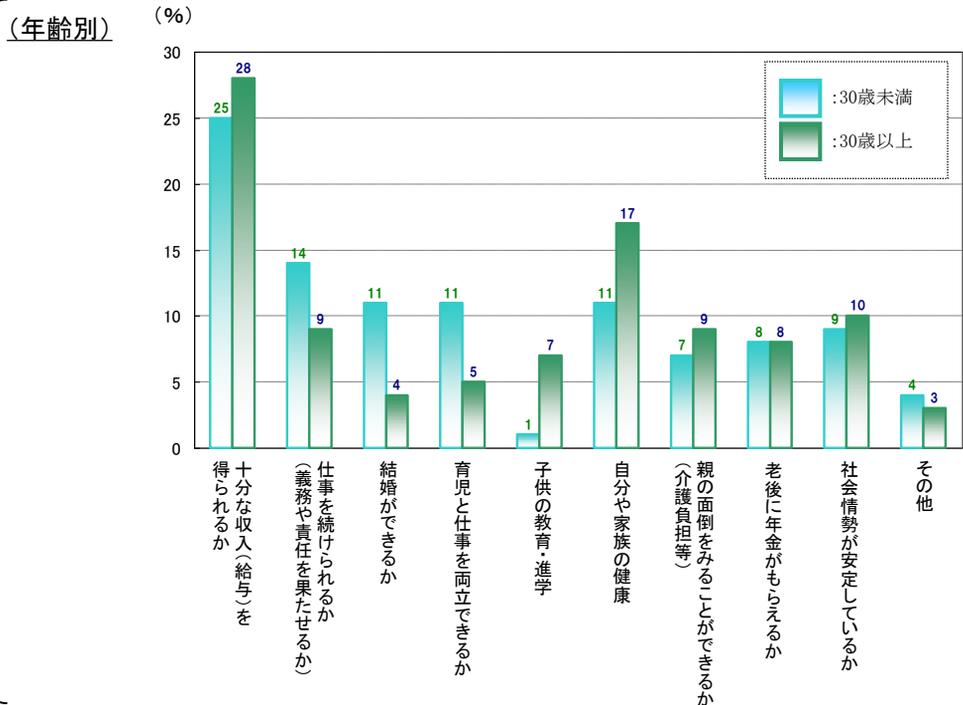
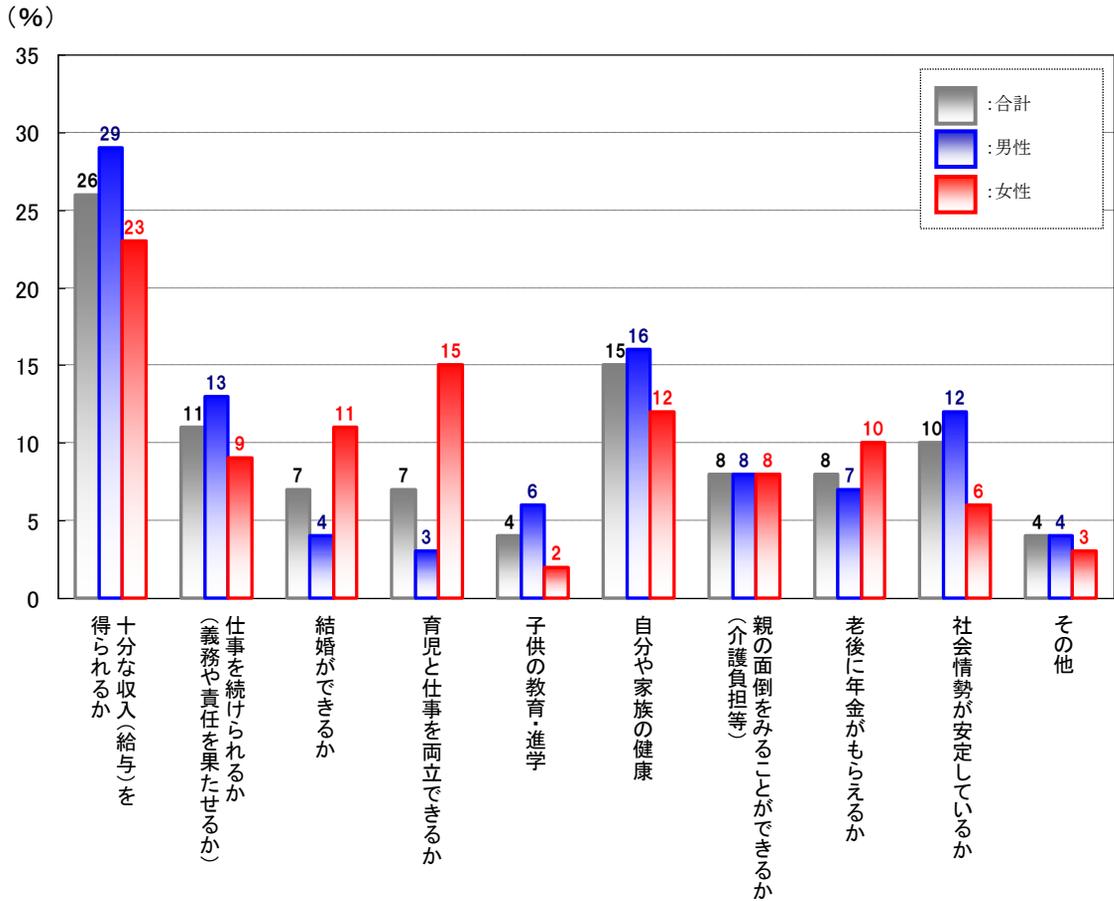
○男女別にみても、各項目はほぼ同水準



1. 「暮らしや生活」について

Q3. 将来のあなたの暮らしに関して、最も不安に感じることは何ですか？

○「十分な収入が得られるか」(26%)が最も高く、「自分や家族の健康」(15%)が続く
 ○女性は「育児と仕事が両立できるか」(15%)「結婚ができるか」(11%)の割合が高い

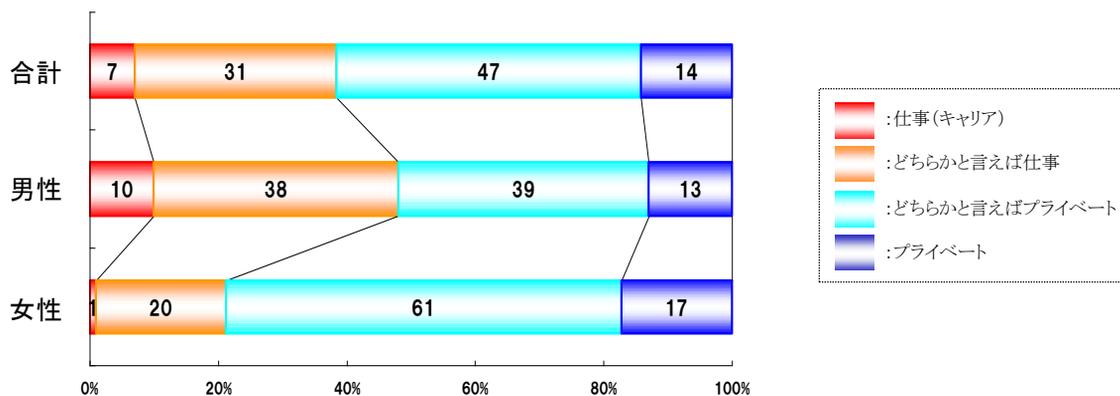


2. 「仕事やキャリア」について

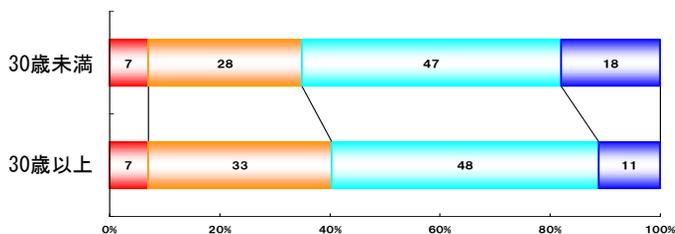
Q4. あなたは仕事(キャリア)とプライベートのどちらを優先したいとお考えですか？

○「(どちらかと言えば)プライベート」を優先する人が61%

○「(どちらかと言えば)プライベート」は「男性」(52%)より、「女性」(78%)の割合が高い



(年齢別)

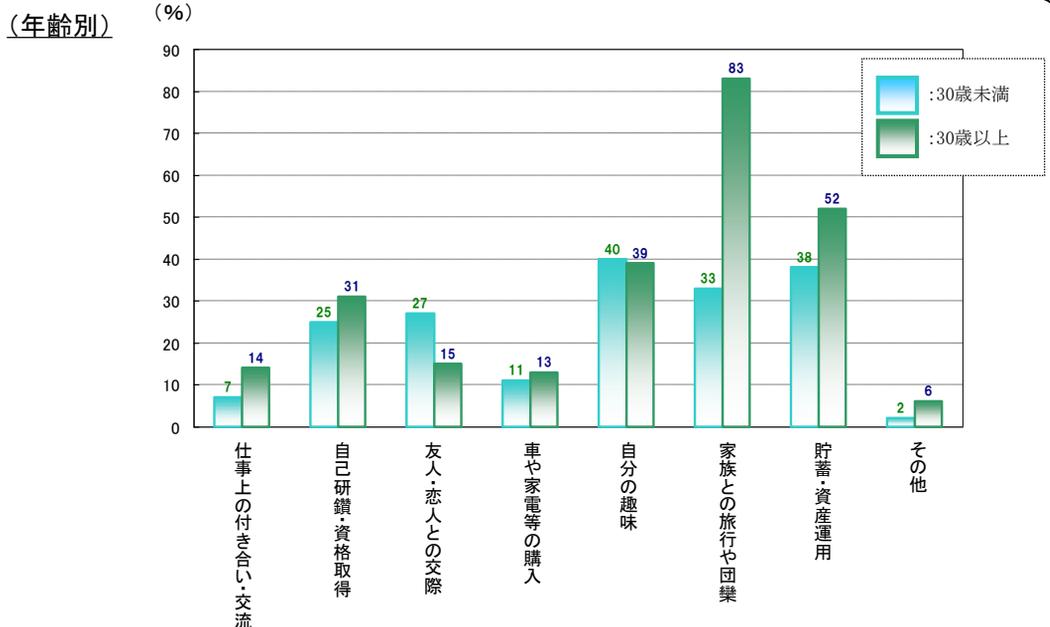
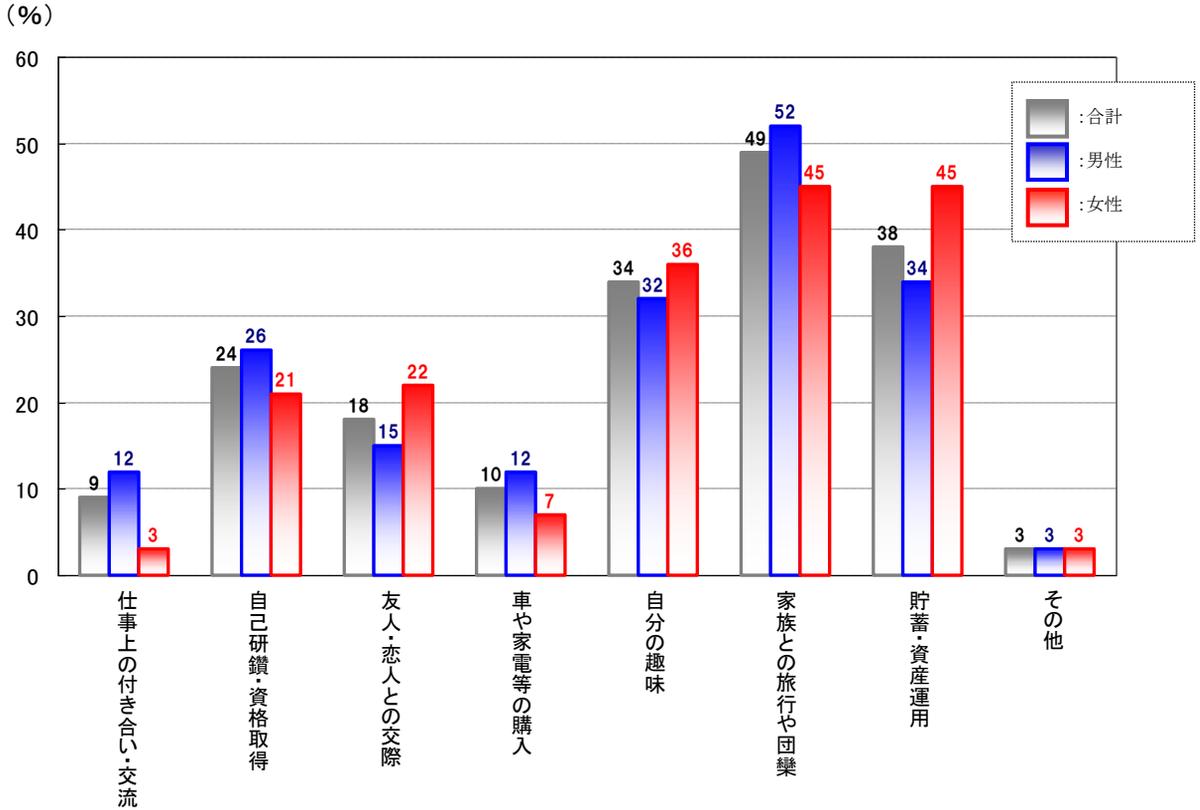


2. 「仕事やキャリア」について

Q5. あなたが今よりもっとお金をかけたい(支出したい)と考えるものはなんですか？

(主なものを2つまで回答)

- 「家族との旅行や団欒」(49%)が最も高く、「貯蓄・資産運用」「自分の趣味」が3割台で続く
- 女性では「貯蓄・資産運用」(45%)の割合が高く、「家族との旅行や団欒」と同水準

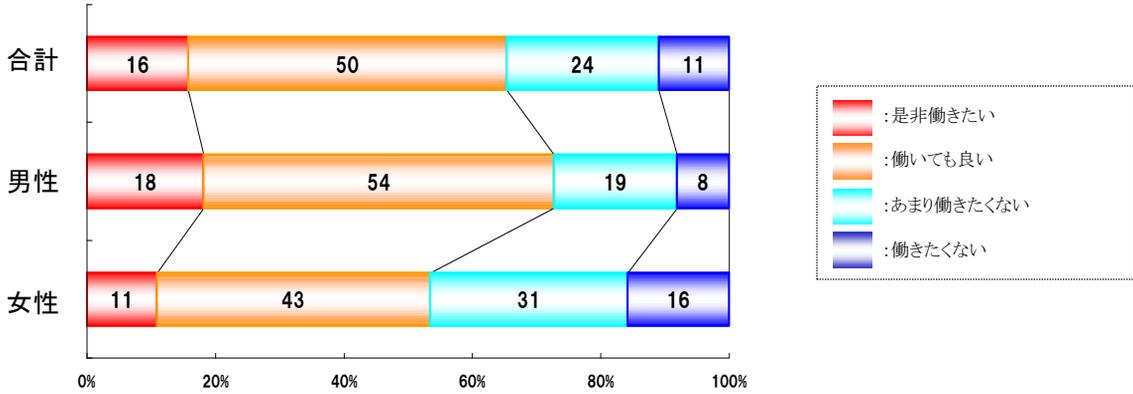


2. 「仕事やキャリア」について

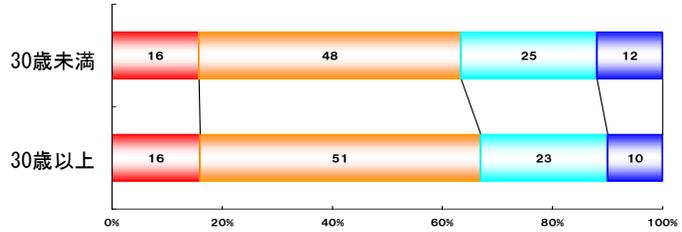
Q6. 安定した収入が得られる場合、大都市圏(東京圏、大阪圏、名古屋圏)以外で働くことについてどうお考えですか？

○「是非働きたい」「働いても良い」の合計で66%

○「是非働きたい」「働いても良い」は「女性」(54%)より、「男性」(72%)の割合が高い



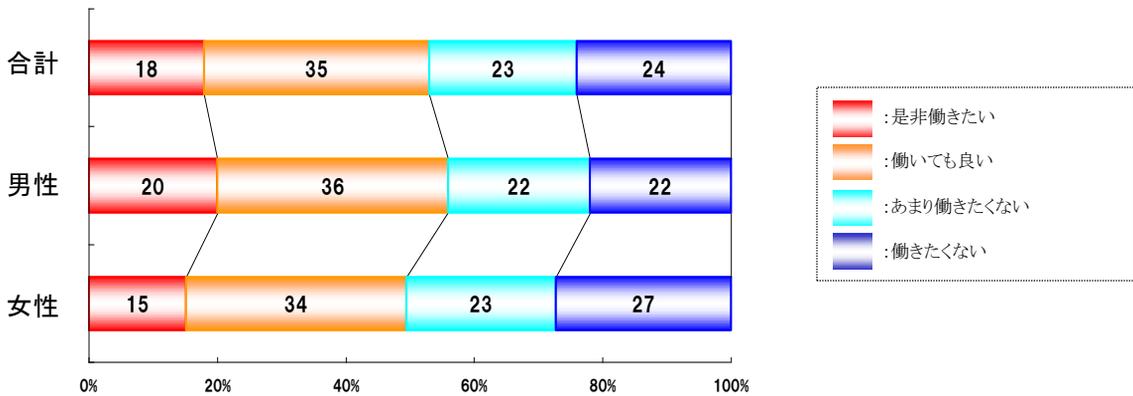
(年齢別)



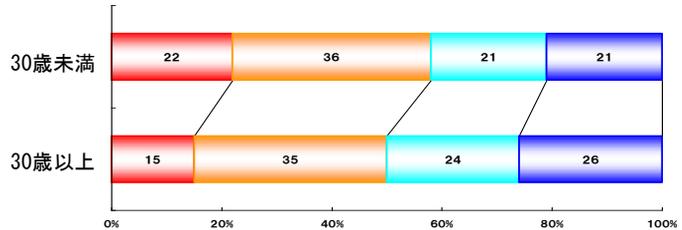
Q7. 海外留学や海外赴任など、海外で働くことについてどうお考えですか？

○「是非働きたい」「働いても良い」の合計で53%

○「是非働きたい」「働いても良い」は「女性」(49%)より、「男性」(56%)の割合が高い



(年齢別)

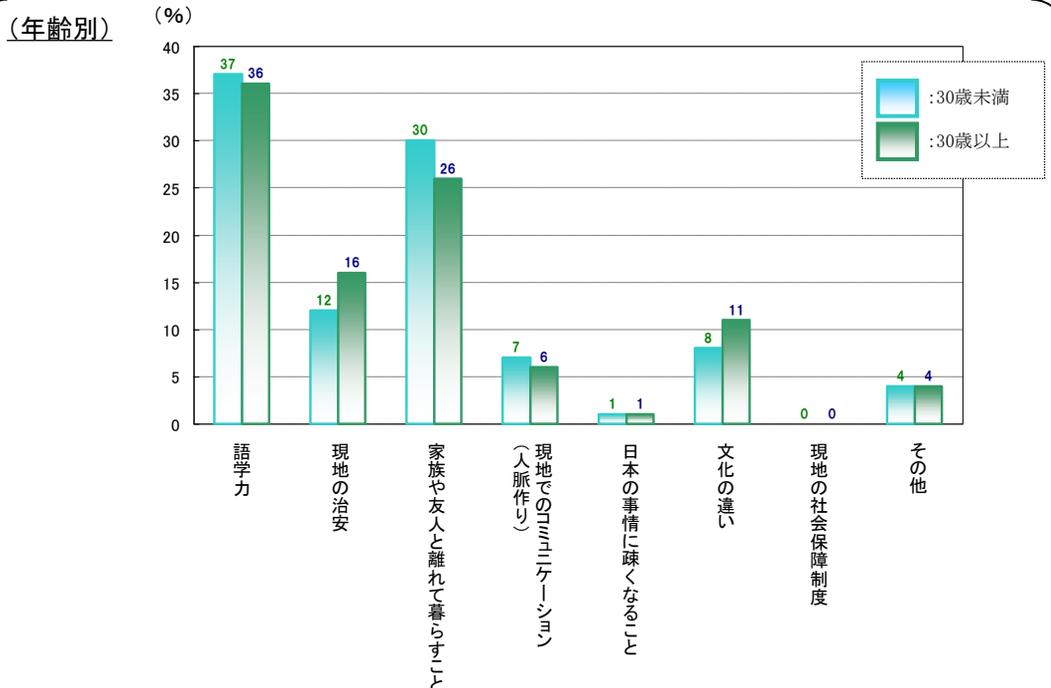
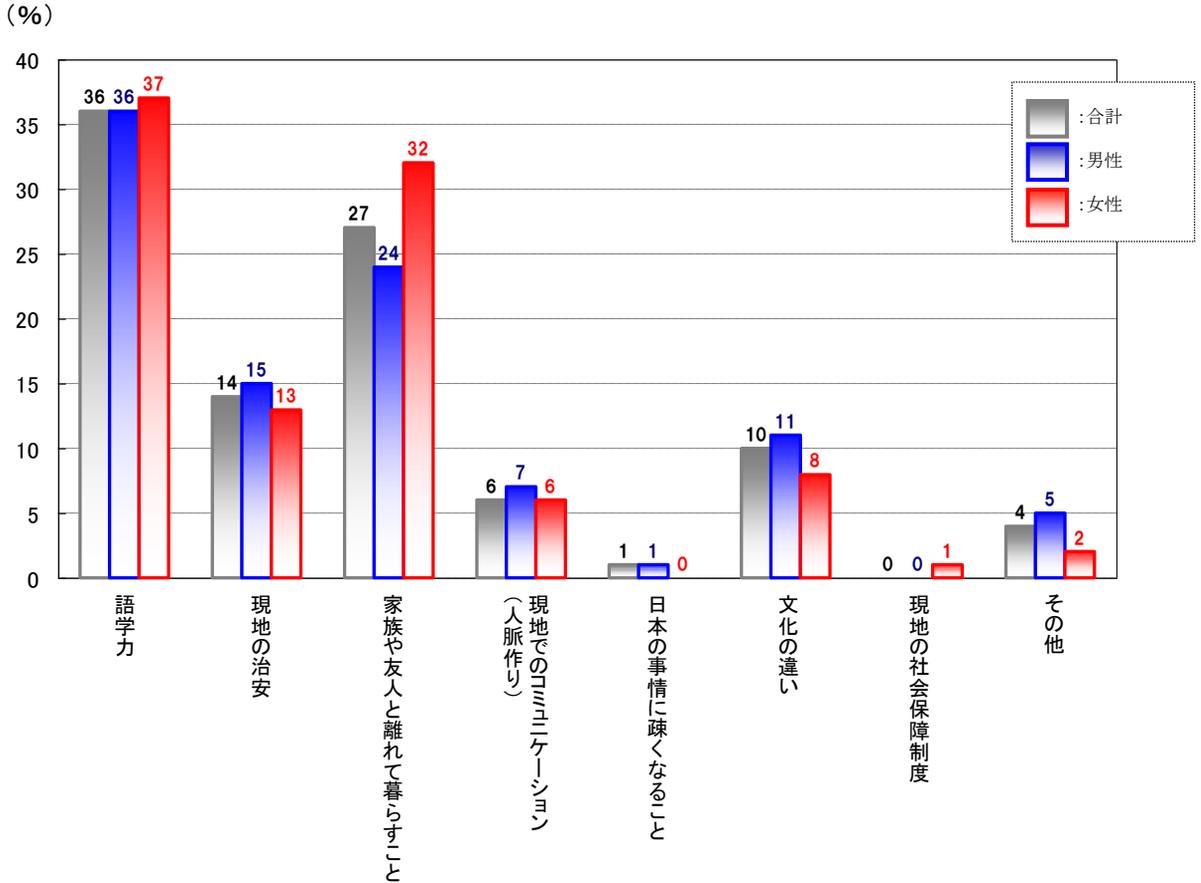


2. 「仕事やキャリア」について

Q8. 海外で働くことに関して、最も不安に感じることは何ですか？

(Q7で否定的な回答者が回答)

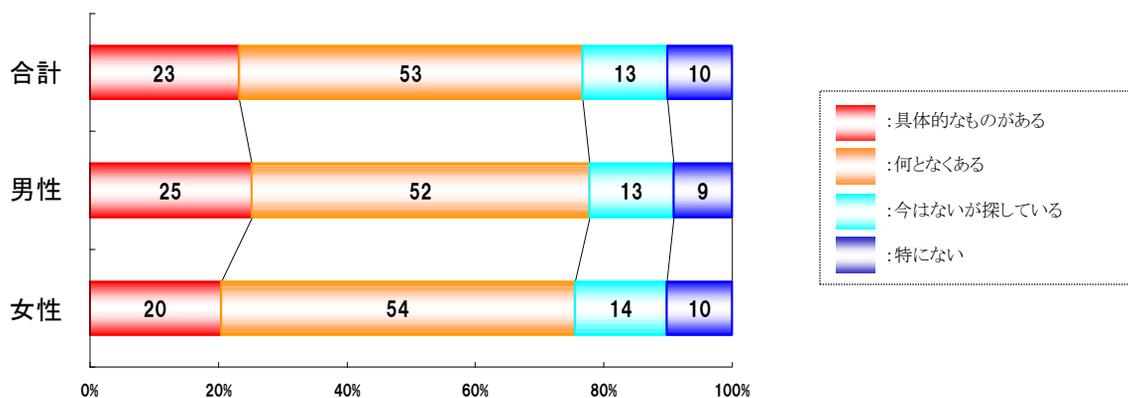
- 「語学力」(36%)が最も高く、「家族や友人と離れて暮らすこと」(27%)が続く
- 「家族や友人と離れて暮らすこと」は「男性」(24%)より、「女性」(32%)の割合が高い



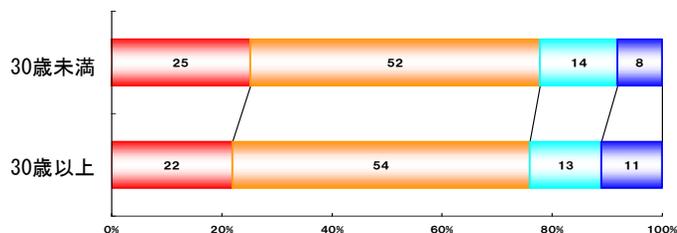
3. 将来の「夢」や「希望」について

Q9. あなたには、今、「夢」や「希望」がありますか？

- 「何となくある」(53%)が最も高く、「具体的なものがある」(23%)が続く
- 男女別にみても、各項目はほぼ同水準



(年齢別)

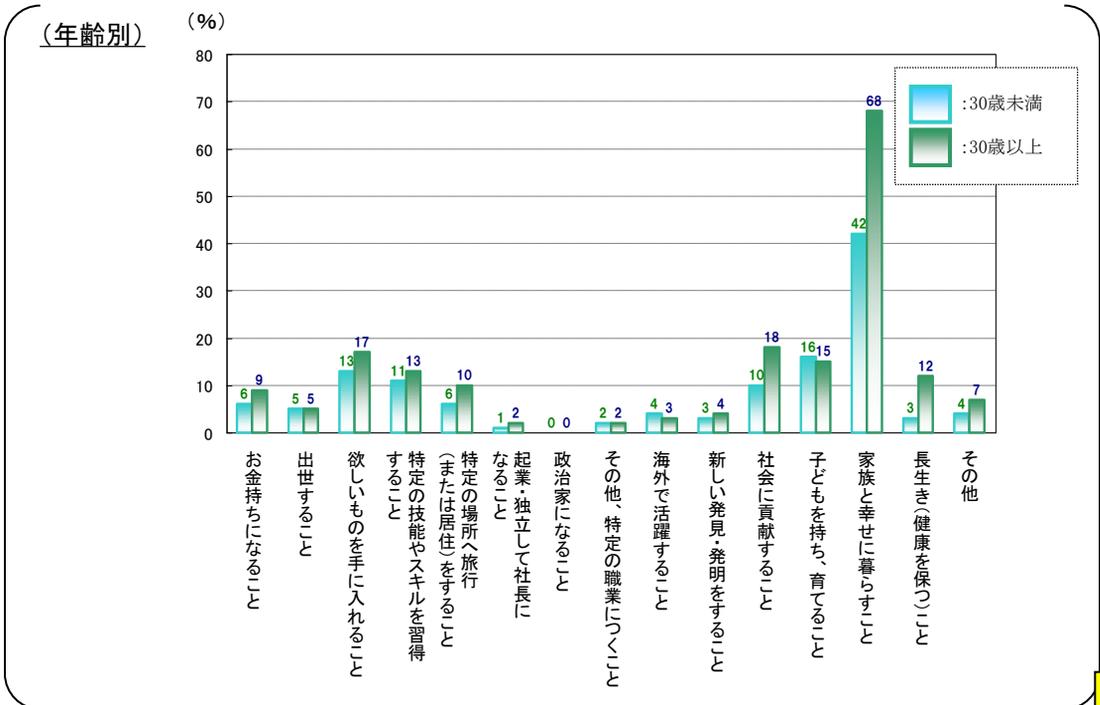
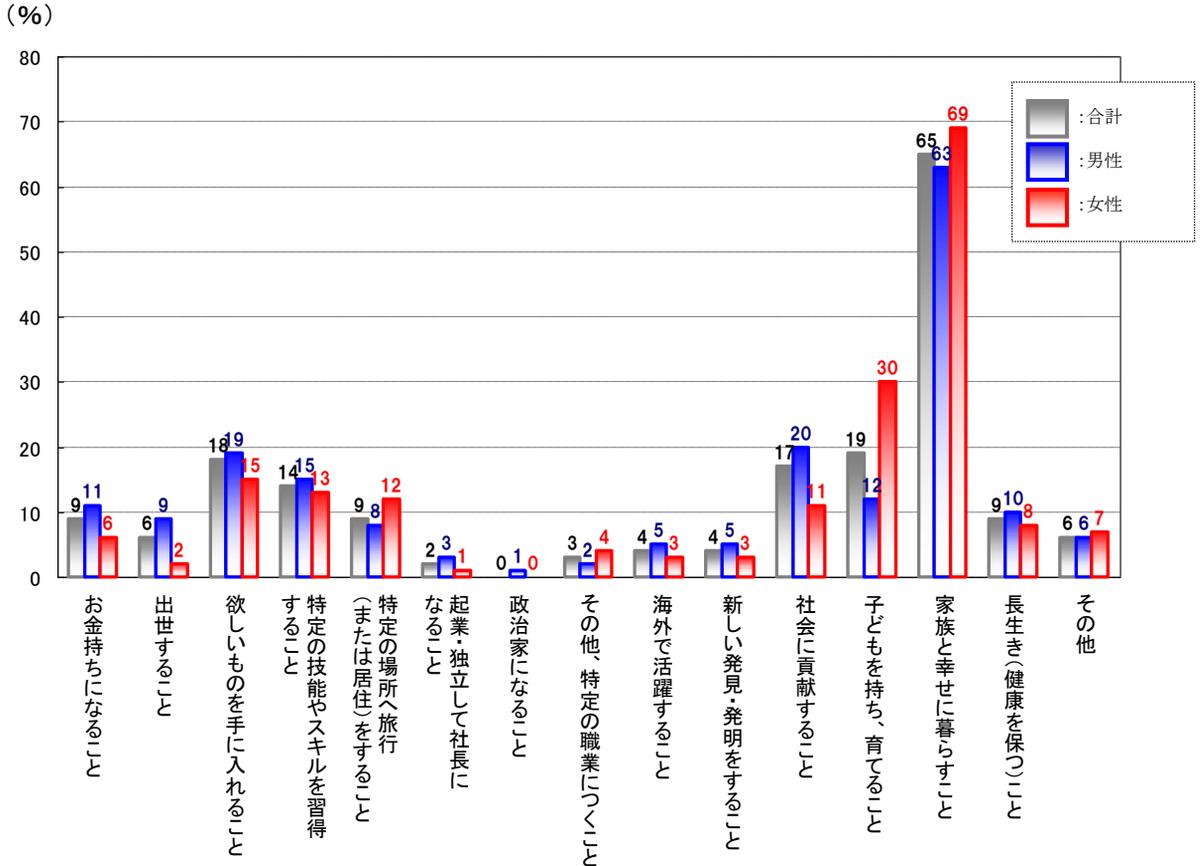


3. 将来の「夢」や「希望」について

Q10. あなたにとって「夢」や「希望」とは何ですか？

(主なものを2つまで回答)

- 「家族と幸せに暮らすこと」(65%)が最も高い
- 「家族と幸せに暮らすこと」は「男性」(63%)より、「女性」(68%)の割合が高い

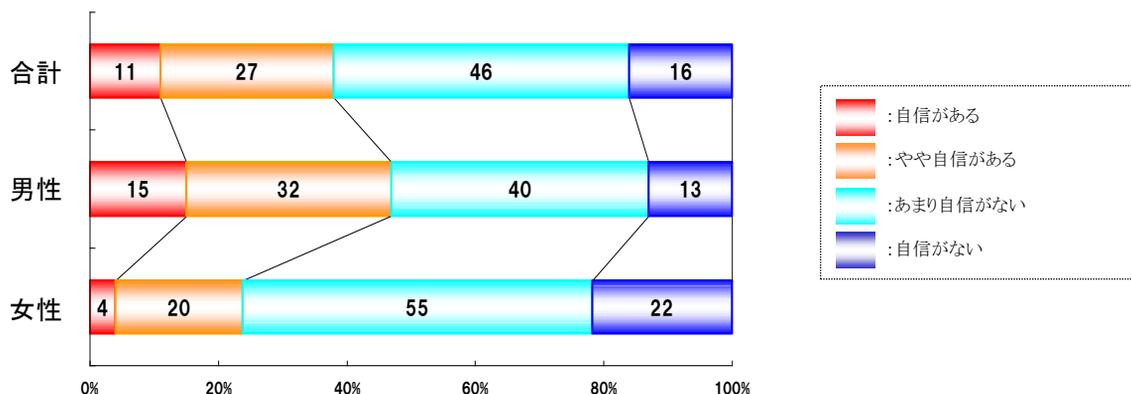


4. 日本という「国」について

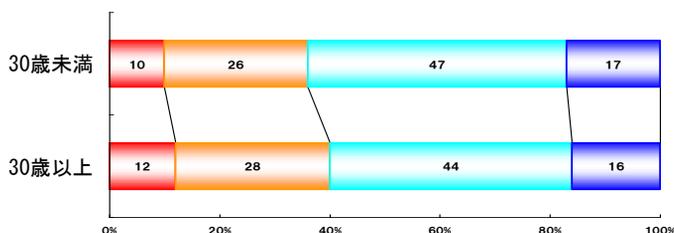
Q11. あなたは日本の歴史や文化について、外国人に説明する自信がありますか？

※語学的能力は加味しない

- 「(やや)自信がある」(38%)より、「(あまり)自信がない」(62%)の割合が高い
- 「(あまり)自信がない」は「男性」(53%)より、「女性」の(77%)の割合が高い

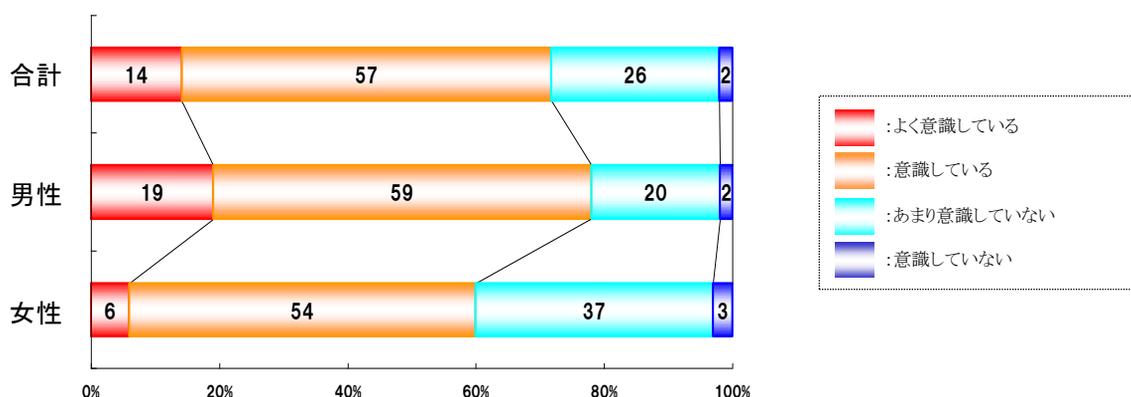


(年齢別)

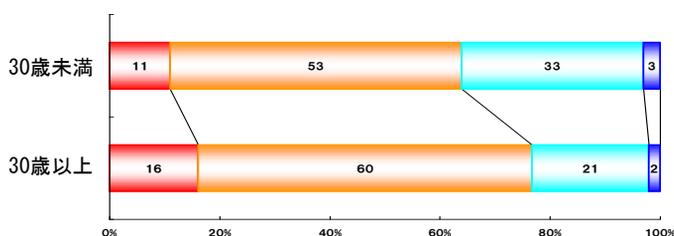


Q12. 日本の国が抱える課題について、日頃どの程度意識していますか？

- 「(よく)意識している」の割合は71%と高い
- 「(よく)意識している」は「女性」(60%)より、「男性」(78%)の割合が高い



(年齢別)

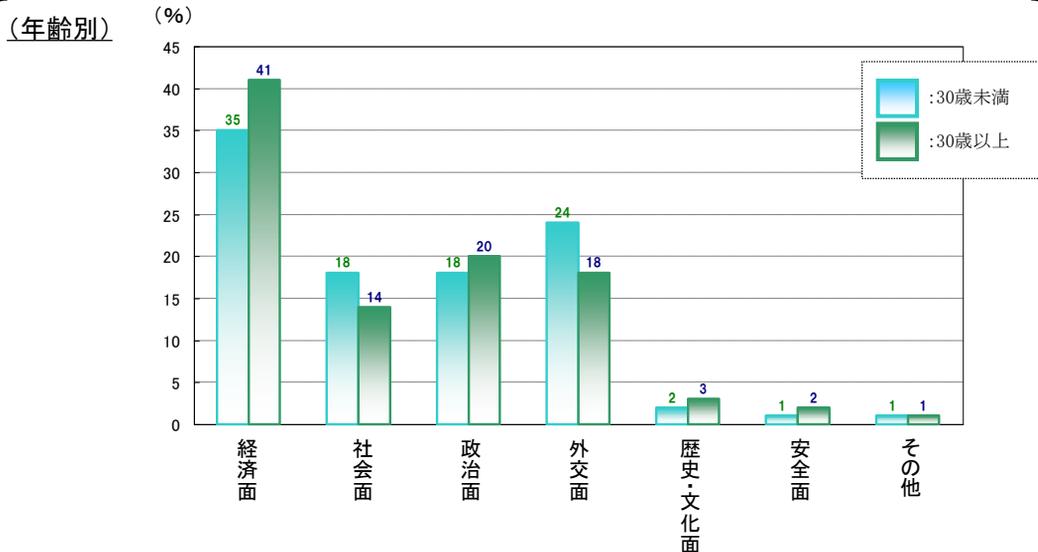
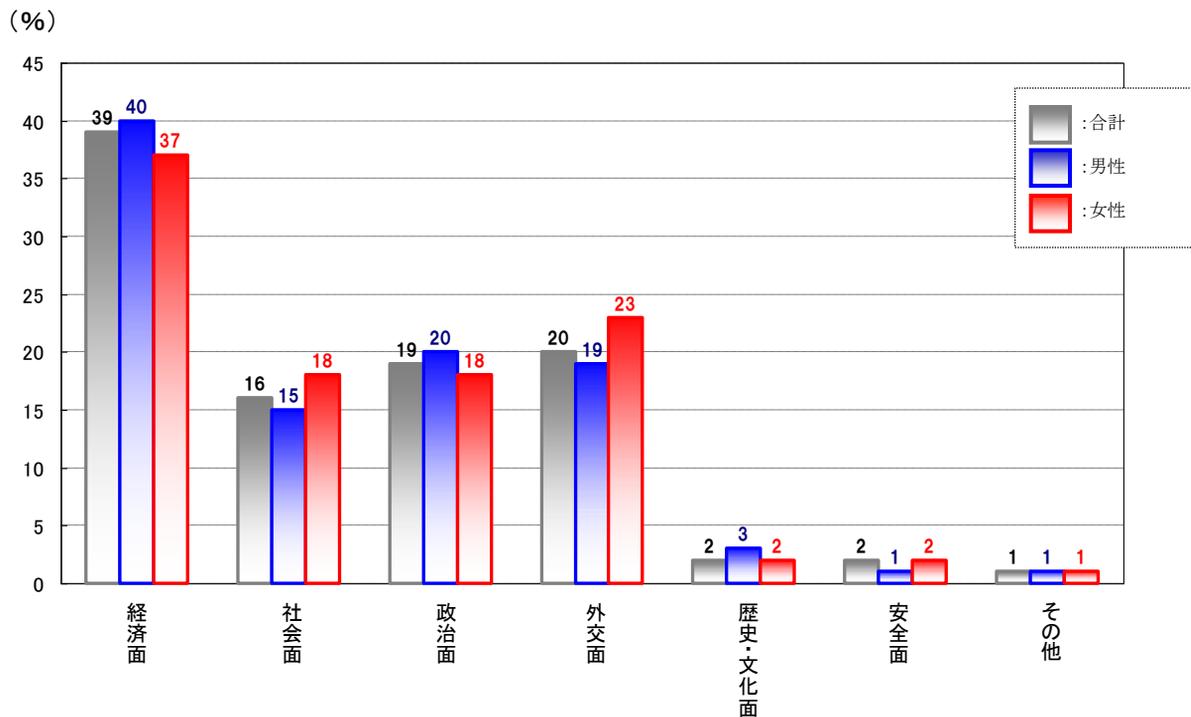


4. 日本という「国」について

Q13. 具体的にどのような国の課題を意識していますか？

(Q12で「よく」意識している」回答者が回答)

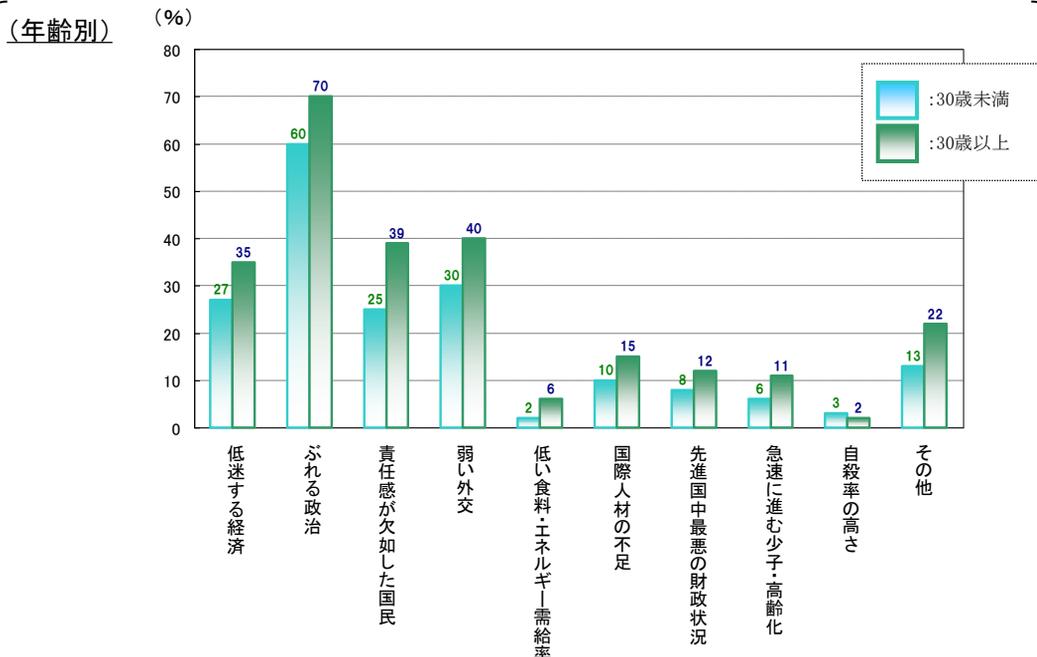
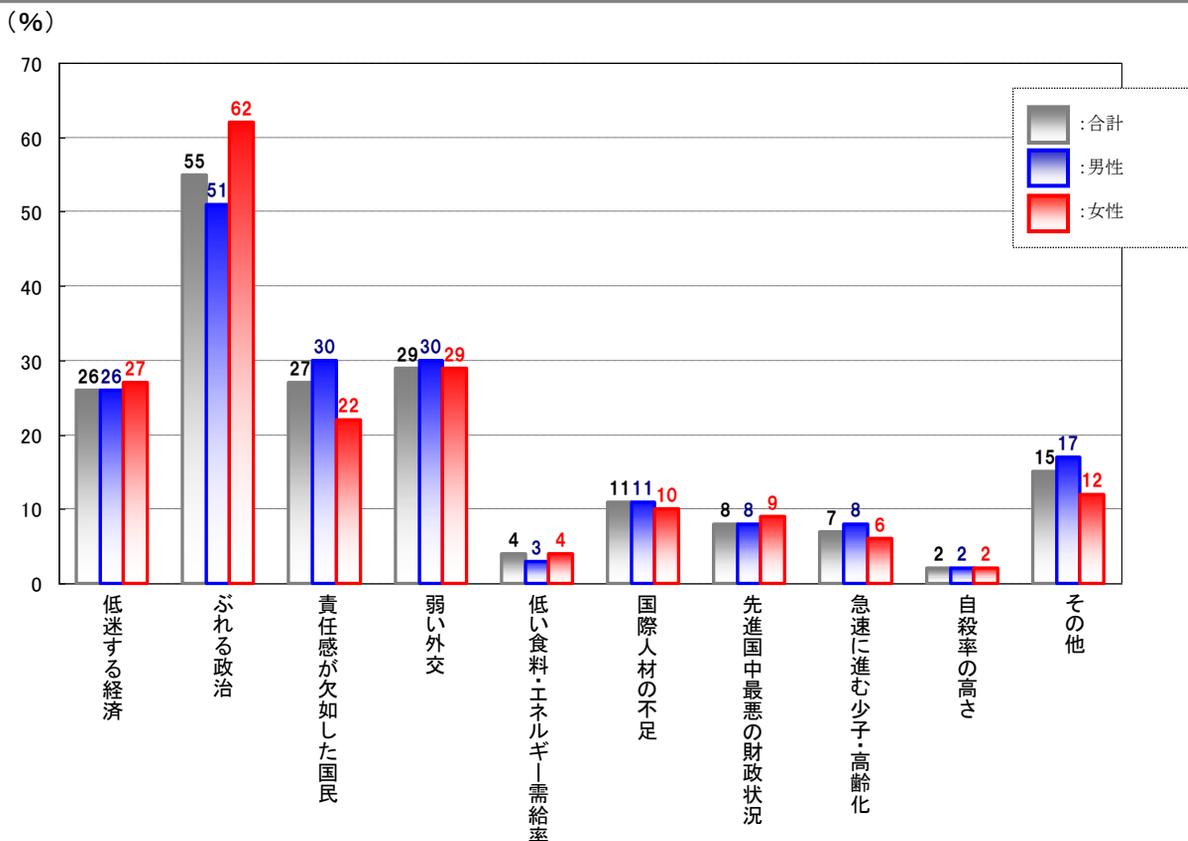
- 「経済面」(39%)が最も高く、「外交面」(20%)、「政治面」(19%)が続く
- 「歴史・文化面」「安全面」(いずれも2%)の割合は少ない



4. 日本という「国」について

Q14. 国際的に見ると、「日本人は、日本が好きと感じる人の割合に比べ、日本を誇りに感じる人の割合が低い」という特徴がありますが、この差が生じる要因は何だとお考えですか？
 (主なものを2つまで回答)

- 「ぶれる政治」(55%)が最も高く、「弱い外交」「責任感が欠如した国民」などが2割台で続く
- 「ぶれる政治」は「男性」(51%)より、「女性」(62%)の割合が高い

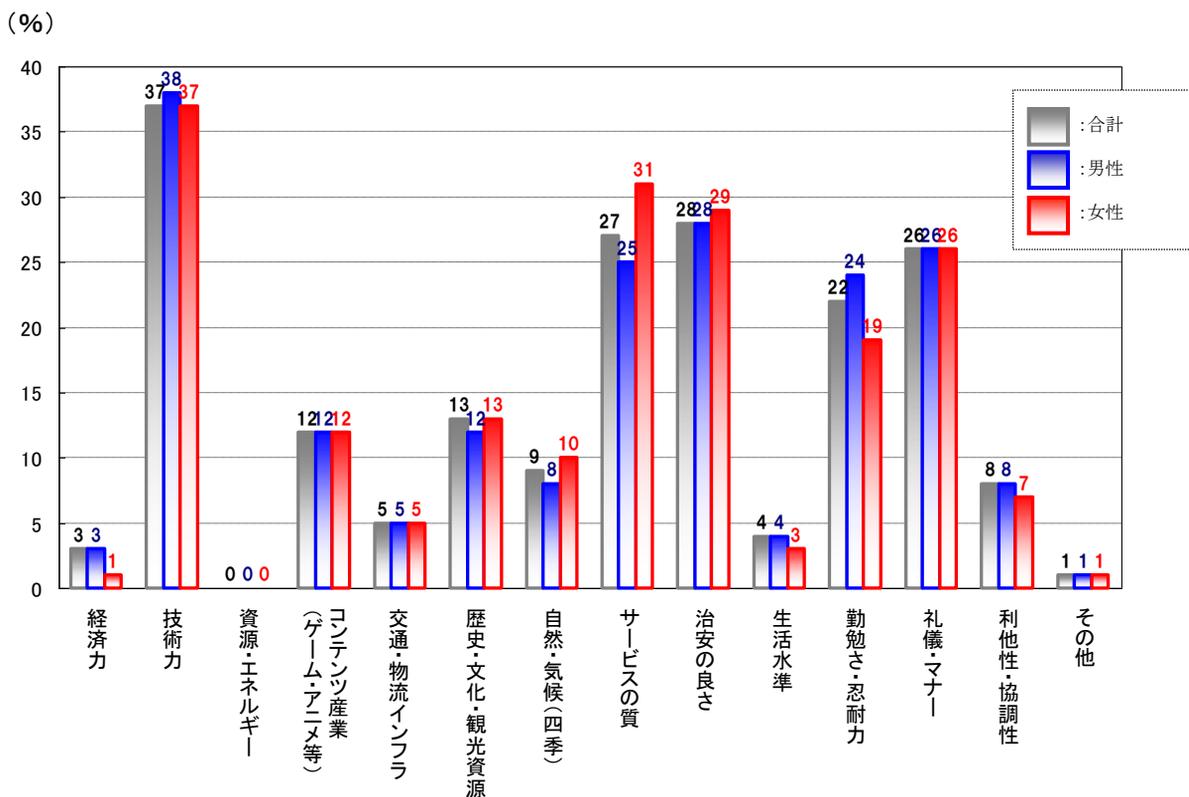


4. 日本という「国」について

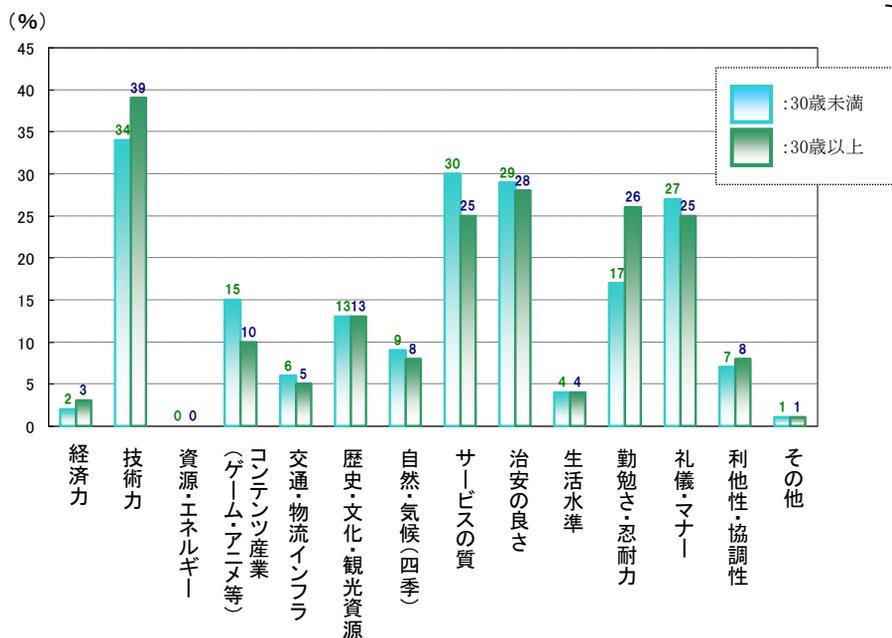
Q15. 他国に対して誇れる日本の強み・良さは何だと思いますか？

(主なものを2つまで回答)

- 「技術力」(37%)が最も高く、「治安の良さ」(28%)、「サービスの質」(27%)が続く
- 「サービスの質」は「男性」(25%)より、「女性」(31%)の割合が高い



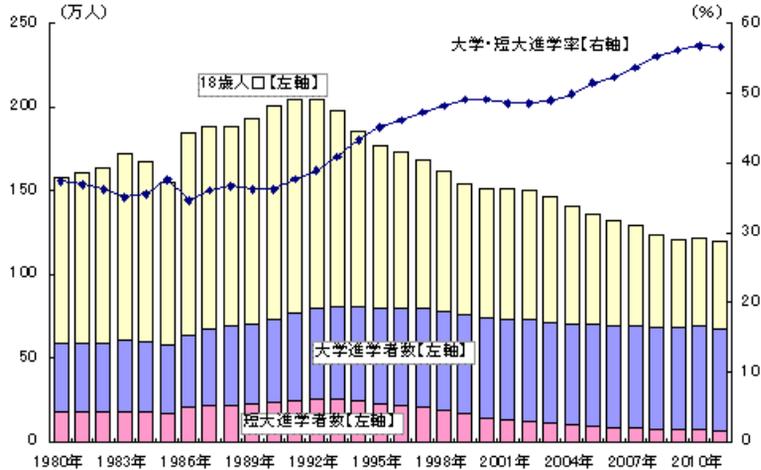
(年齢別)



②データ資料集

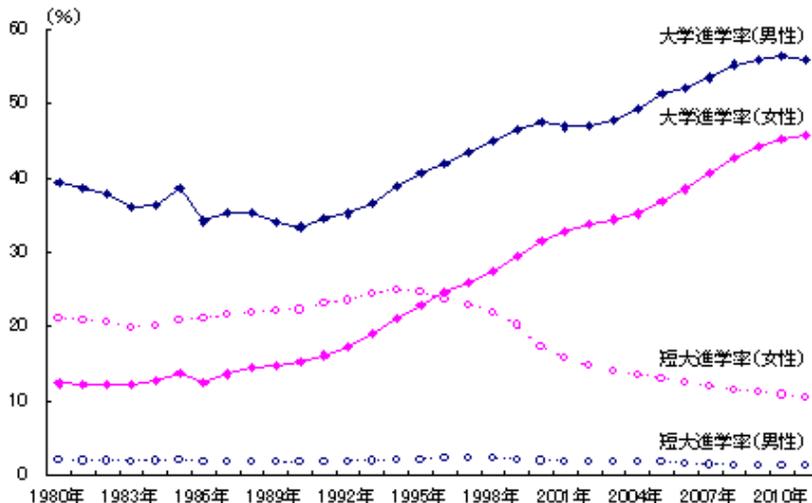
- 18歳人口は減少するものの、大学進学率の向上により、大学進学者数はほぼ横ばいを維持
- 1980年代10%台であった女性の大学・短大進学率は直近で4割を超える水準まで上昇

大学・短大進学者数と進学率の推移



- (注1) 18歳人口は3年前の中学校卒業(見込)者数を適用
 (注2) 大学進学者数及び短大進学者数は、18歳人口に大学進学率あるいは短大進学率あるいは短大進学率を乗じて算出。進学率はいずれも過年度高卒者等を含むもの
 (注3) 大学・短大進学率は過年度高卒者等を含むもの
 (出典) 文部科学省「平成23年度学校基本調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

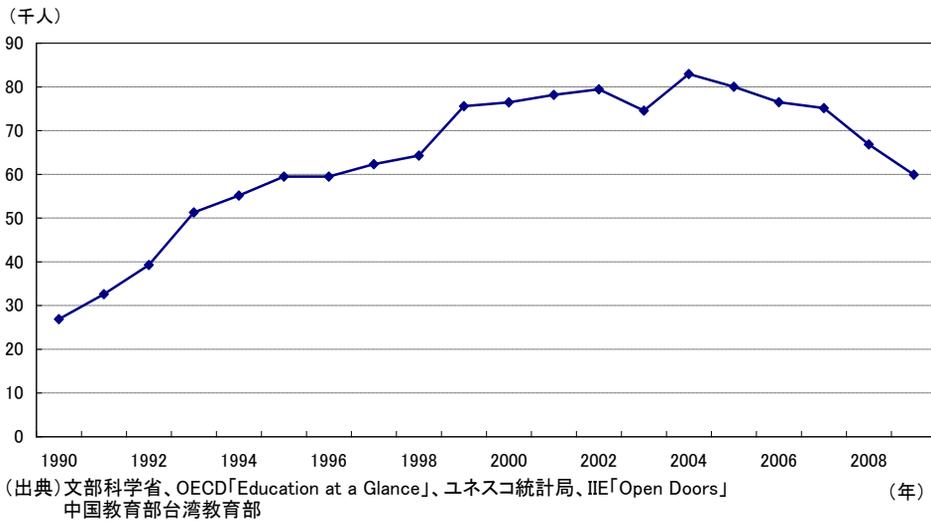
性別にみた大学進学率および短大進学率の推移



- (注1) 大学・短大進学率は過年度高卒者等を含むもの
 (出典) 文部科学省「平成23年度学校基本調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

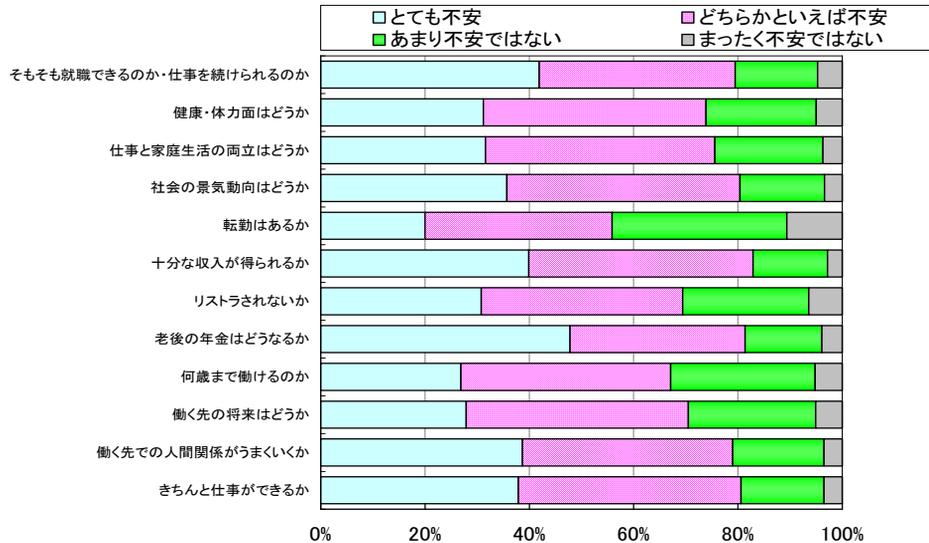
○海外への留学者数は2004年の約8.2万人から2009年には約6万人まで低下

日本から海外への海外留学者の推移



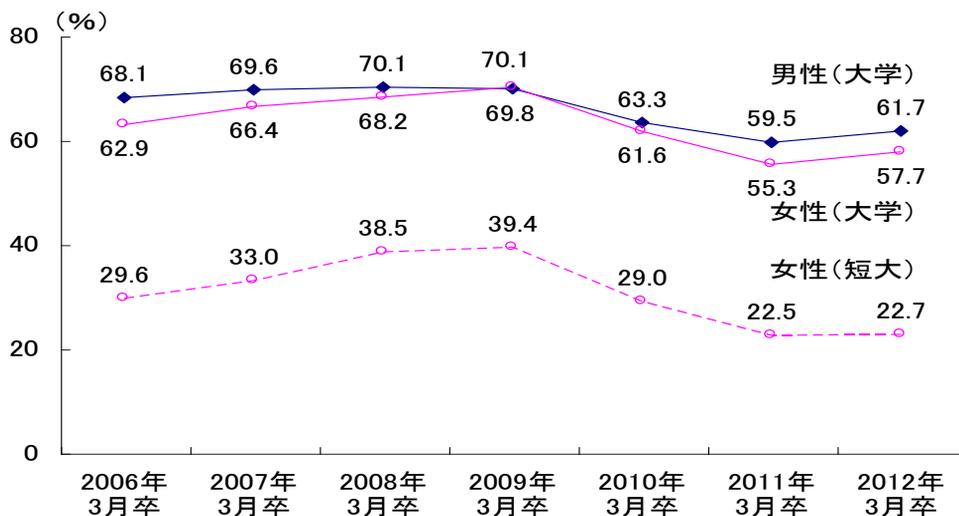
- 働くことについて「老後の年金はどうなるのか」、「そもそも就職できるのか・仕事を続けられるのか」「十分な収入が得られるか」に不安を持つ若者が多い
- 内定率は男性(大学)で2009年以前の70%程度から低下傾向となり、近年では60%程度

働くことに関する若者の不安



(出典)内閣府「2012年度版子ども・若者白書」

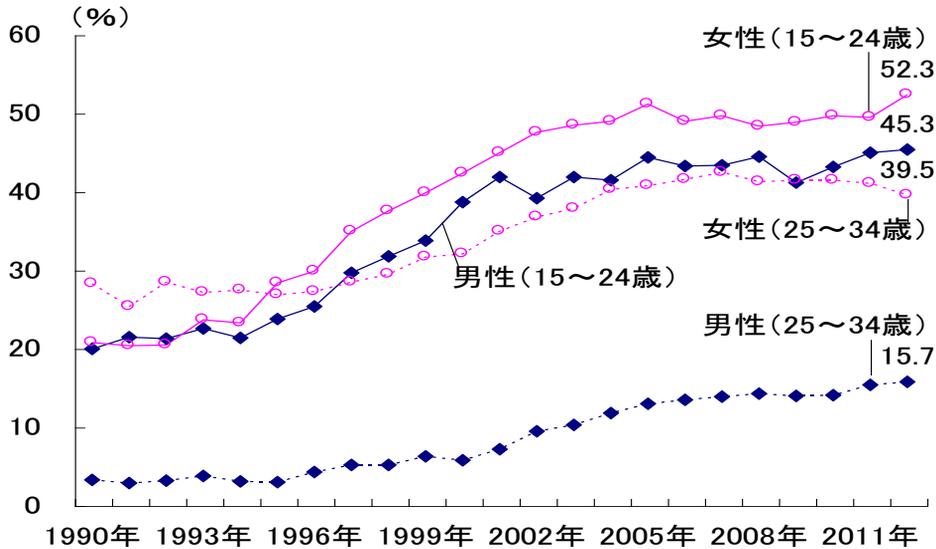
就職内定率の推移



(出典)厚生労働省「平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

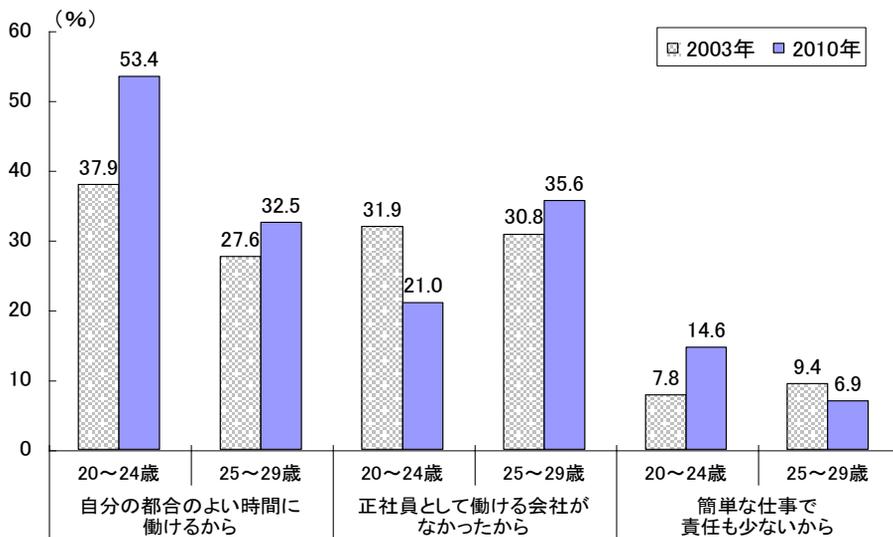
- 2011年時点で15～24歳の半数は非正規雇用者。従来は大半が正規雇用者であった25～34歳の男性でも非正規雇用率は15.7%
- 非正規雇用を選択した理由は「正社員として働ける会社がなかったから」よりも「自分の都合の良い時間に働けるから」

若年層の非正規雇用者の割合



(注) 1990年～2001年は各月2月、2002年～2010年は平均値。2011年は1～9月の平均値、2012年は1～3月の平均値
 (出典) 総務省「労働力調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

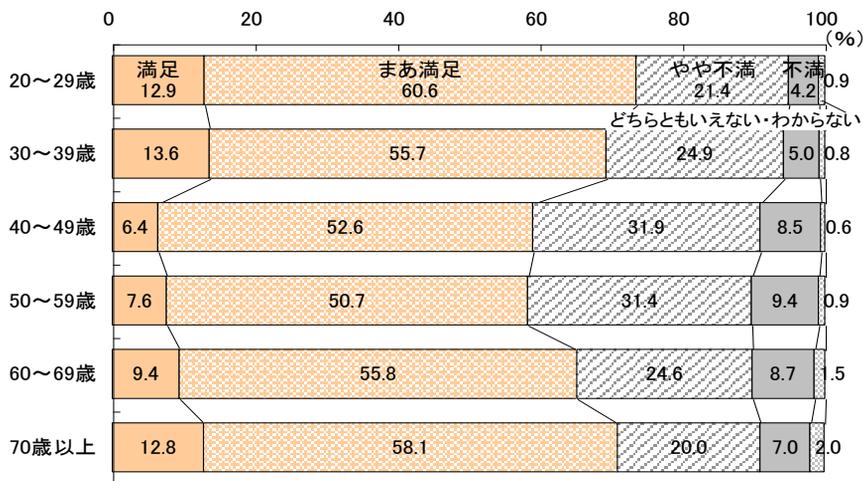
若年層の非正規雇用者が現在の就業形態を選択した理由



(出典) 厚生労働省「平成23年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

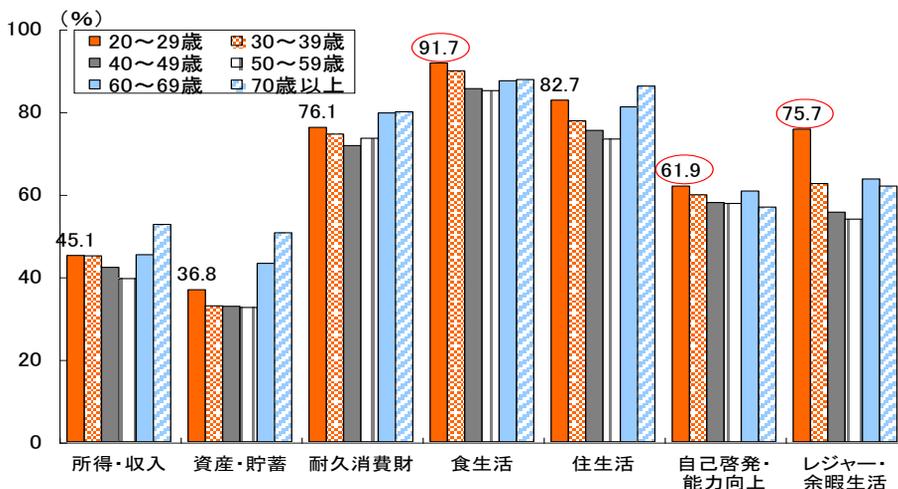
- 20歳代の7割以上は現在の生活に満足しており、他の世代より満足度が高い
- 分野別にみると、「食生活」「自己啓発・能力向上」「レジャー・余暇生活」で他の世代を上回っている

年代別に見た現在の生活に対する満足度



(出典) 内閣府「平成23年度国民生活に関する世論調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

年代別に見た現在の生活各面での満足度



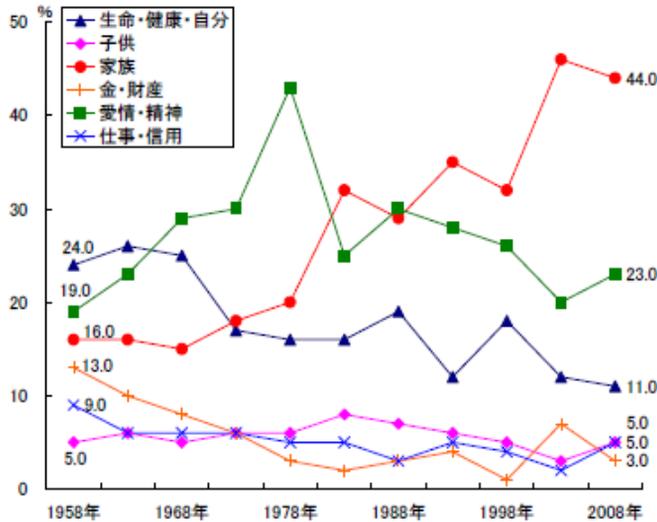
(出典) 内閣府「平成23年度国民生活に関する世論調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

(注1) 満足度は、現在の生活について「満足」「まあ満足」「どちらともいえない」「やや不満」「不満」の5段階で尋ねて得られた上位2つの割合

(注2) 図中丸印で囲まれた数値は20歳代の満足度が最も高かった項目

- 20代の考える一番大切なものは「家族」で、過去から大きく上昇している
- 20歳代の社会貢献意識は上昇傾向にあり、男女ともに半数以上が「社会の一員として何か役に立ちたい」と思っている(1980年度は3割程度)

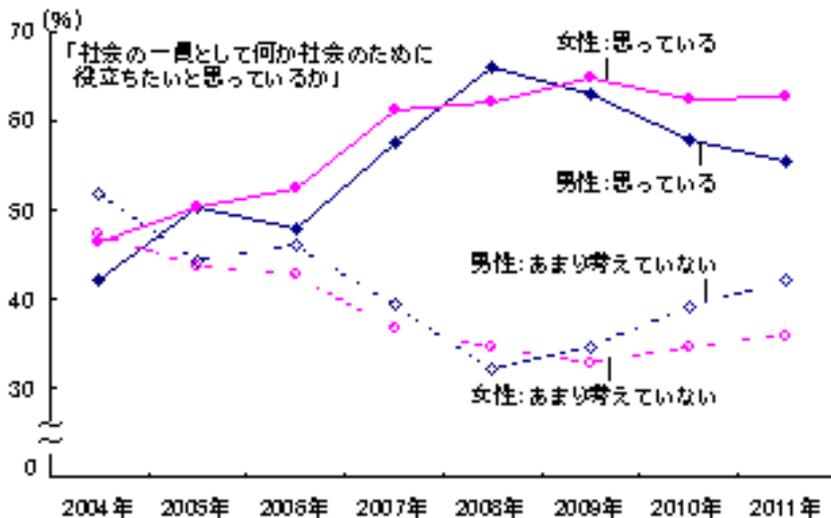
20代の考える一番大切なもの



(注) 30代や国民全体でも同様の推移を示す

(出典) 大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所「日本人の国民性調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

20歳代の社会貢献意識



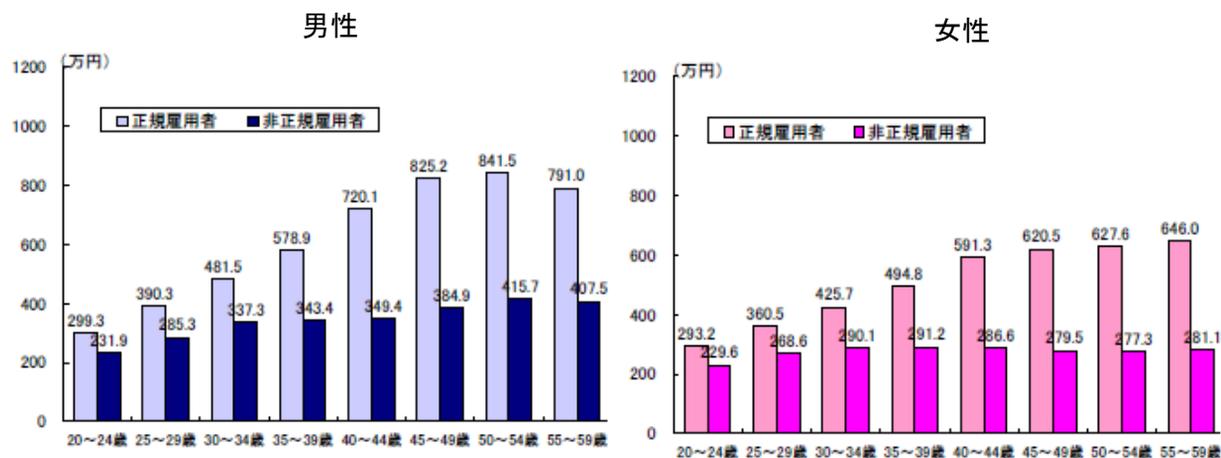
(注1) 30歳代でも同様の推移を示す

(注2) 2011年の調査実施は東日本大震災前の1月である

(出典) 内閣府「社会意識に関する世論調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

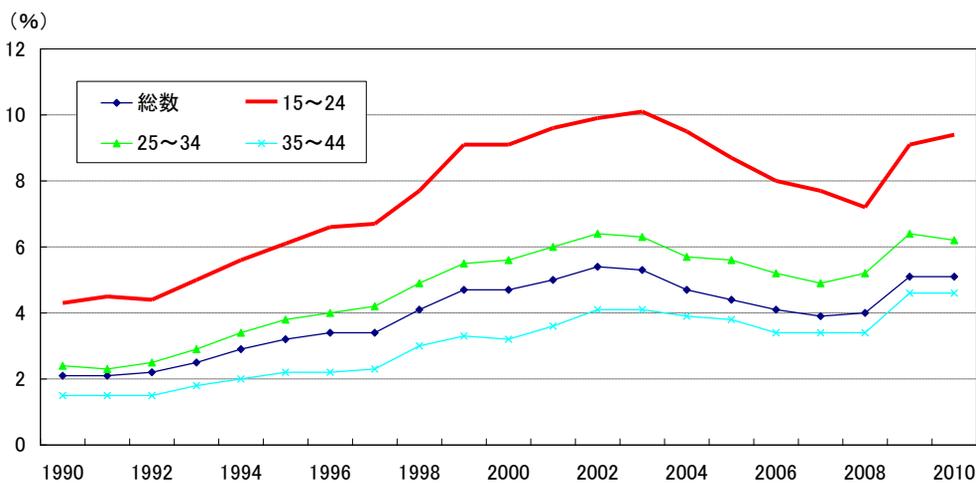
- 男性の正規雇用者の年収が各年代(5歳刻み)毎に100万円程度上昇するのに対し、非正規雇用者の年収は年齢が上昇しても低い伸びに留まる。女性も正規・非正規では格差が大きい。
- 失業率は他の年齢層に比べて15～24歳が高く、2010年は9.4%

正規雇用者と非正規雇用者の年収差（大学・大学院卒）



(注) 正規雇用者は正社員・正職員で、非正規雇用者は正社員・正職員以外の者、
 年収は「所定内給与額」および「年間賞与その他特別給与額」を用いて算出
 (出典) 厚生労働省「平成23年賃金構造基本統計調査」から、ニッセイ基礎研究所作成

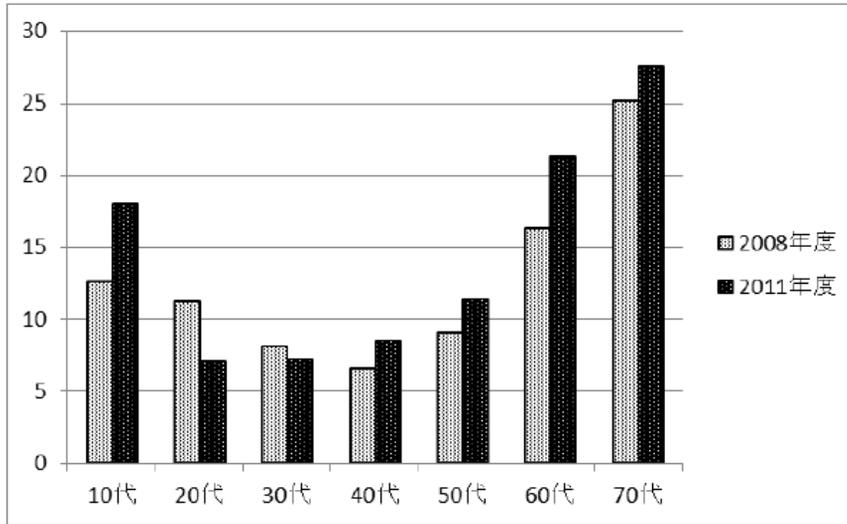
年齢別失業率の推移



(出典) 総務省「労働力調査」

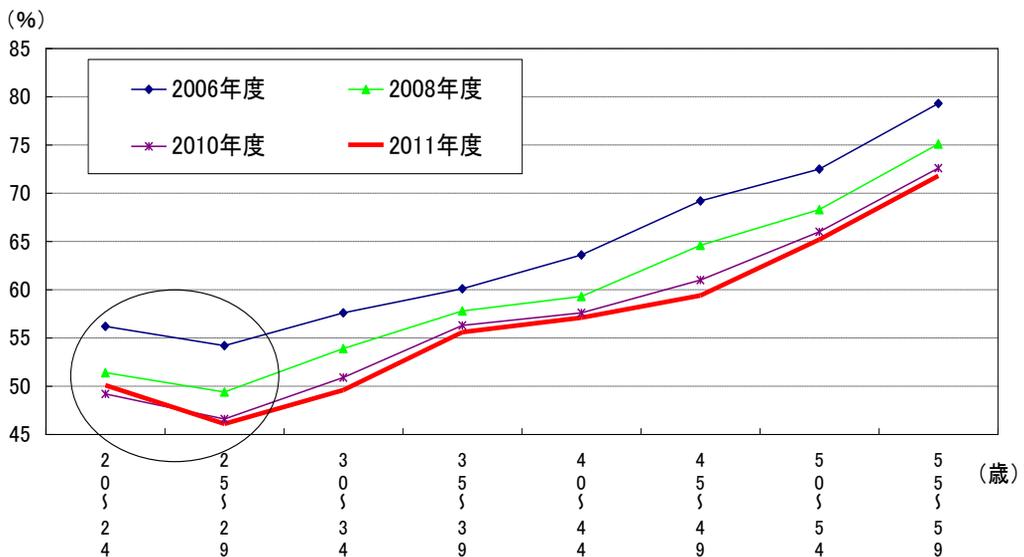
- 将来不安は年齢が若くなるにつれて増大(10代を除く)
- 国民年金納付率は低下基調が続き、2011年度の20歳代の納付率は50%を下回る

老後に明るい見通しを持っている人の年齢別割合



(出典) 内閣府「国民生活選好度調査(2011年度)」

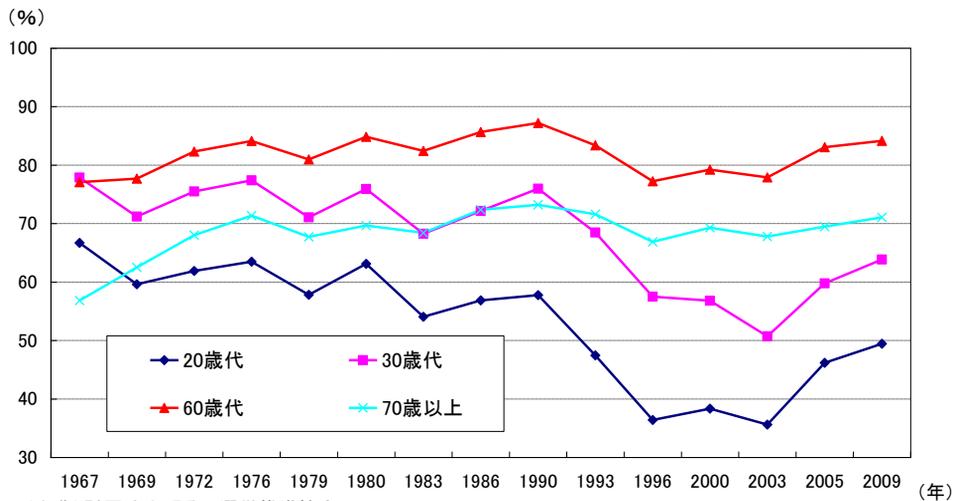
年齢別国民年金納付率の推移



(出典) 厚生労働省「平成23年度の国民年金保険料の納付状況と今後の取組等について」

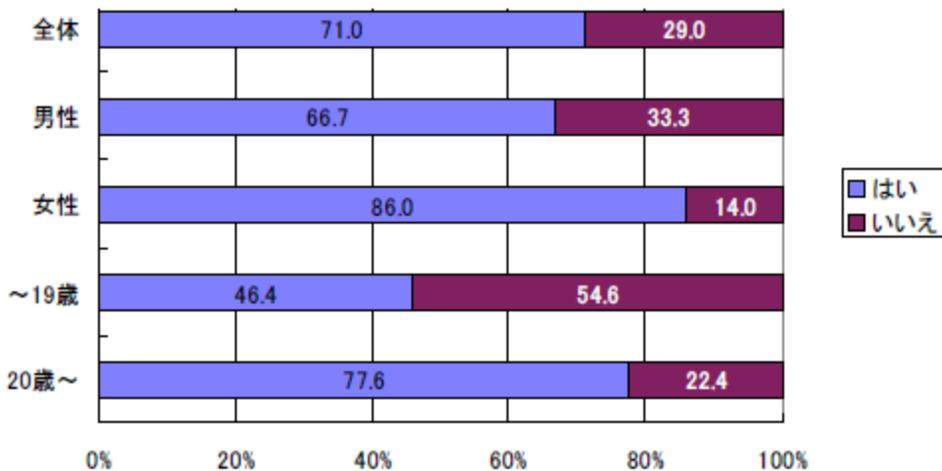
○20歳代の投票率は2005年以降持ち直しているものの、1990年以前の水準を大きく下回る
 ○2012年度の新入社員のうち、「SNSを利用している」のは7割超。中でも女性は86%

年代別投票率の推移(衆院選)



(出典) 財団法人明るい選挙推進委員会

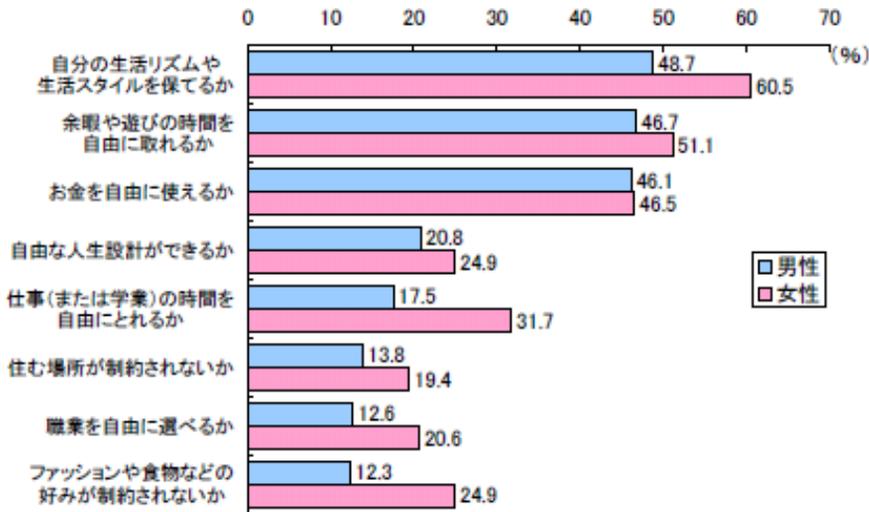
SNSを利用している割合



(出典) 日本生産性本部「2012年度 新入社員 春の意識調査」

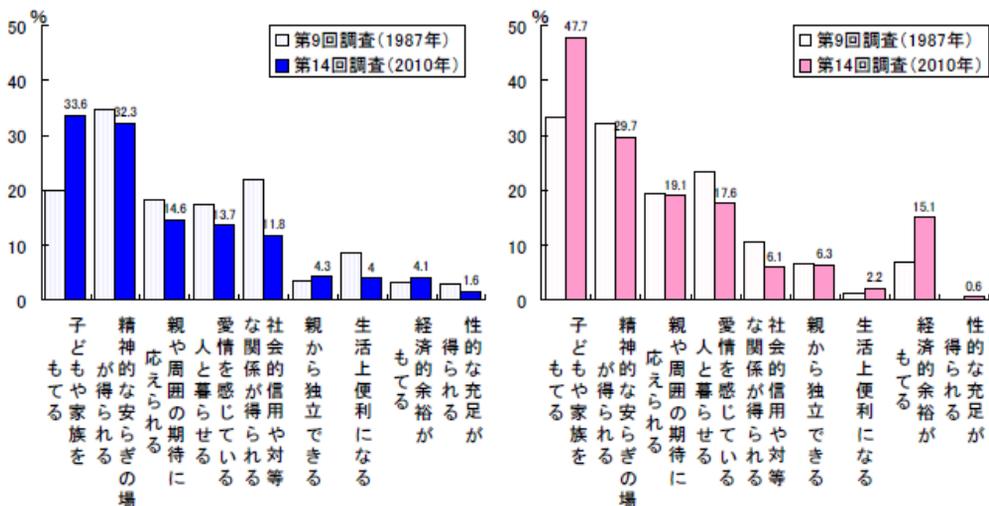
- 時間や所得の使途などライフスタイルに関わる意思決定の自由度を重視する若年層が多い
- 結婚の利点は、男女とも「子どもや家族をもてる」「精神的な安らぎの場が得られる」が上位で、特に「子どもや家族をもてる」は過去と比べて割合が大きく上昇している

未婚者が結婚を考えたとき気になるもの



(注) 調査対象は18~34歳の未婚男女
 (出典) 国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)」から、ニッセイ基礎研究所作成

18~34歳の未婚者が考える結婚の利点の変化



(注1) 結婚の利点として図中の選択肢のうち最大二つまで選択可能
 (注2) 左から第14回調査(2010年)にて男性で選択割合が多い順
 (出典) 厚生労働省「出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)」から、ニッセイ基礎研究所作成

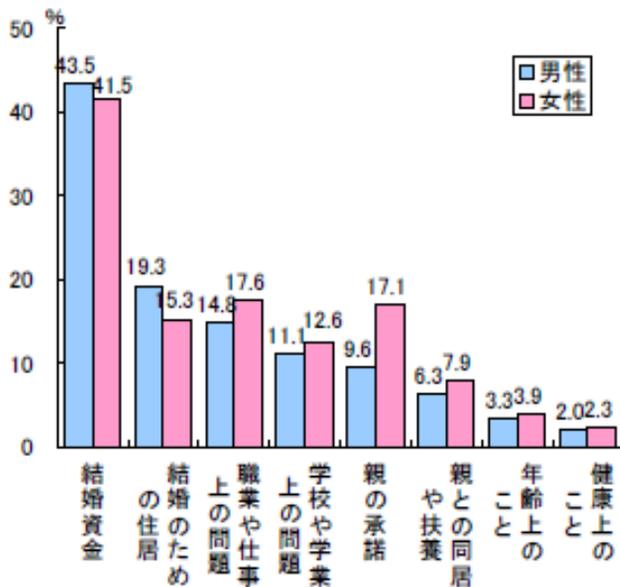
4. 結婚・出産

結婚の障壁・年収別既婚率

○結婚の障壁は「結婚資金」が首位で、「結婚のための住居」「職業や仕事の問題」も多い

○既婚率は、年収300万円未満では1割に満たないが、300万円以上400万円未満では25%を超え、300万円未満の約3倍となる(年収300万の壁)

18～34歳の未婚者で結婚意思を持つ者が1年以内に結婚を考えた場合、結婚の障壁になること

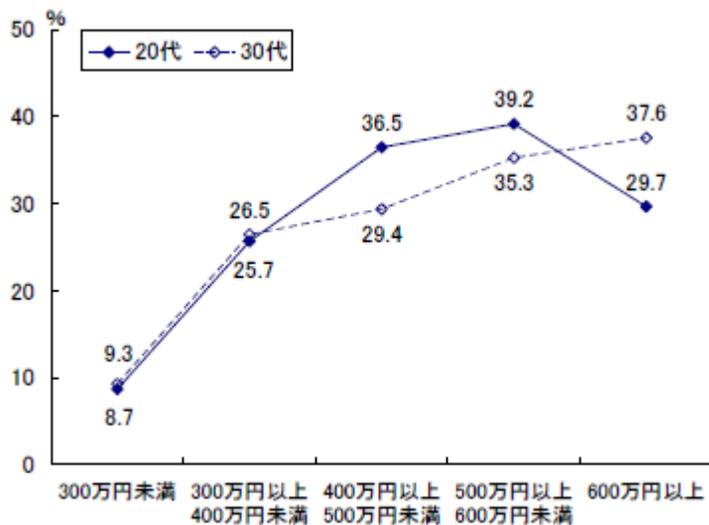


(注1) 選択肢は「結婚生活のための住居」「結婚資金」「親の承諾」「親との同居や扶養」「学校や学業上の問題」「職業や仕事上の問題」「年齢上のこと」「健康上のこと」「その他」の計9つ

(注2) 年齢別に見ると、18～19歳は「学校や学業上の問題」が首位だが、その他は図と同様

(出典) 国立社会保障人口問題研究所「出生動向基本調査(結婚と出産に関する全国調査)」から、ニッセイ基礎研究所作成

年代別にみた20代・30代男性の既婚率



(注) 資料内の注記によると、データ元の調査対象は20代・30代男女、既婚者は結婚3年以内の者。性・年代・未既婚については、総務省「平成17年国勢調査をもとにウェイトバック集計し、「300万円未満」には「収入なし」も含む、とのこと。

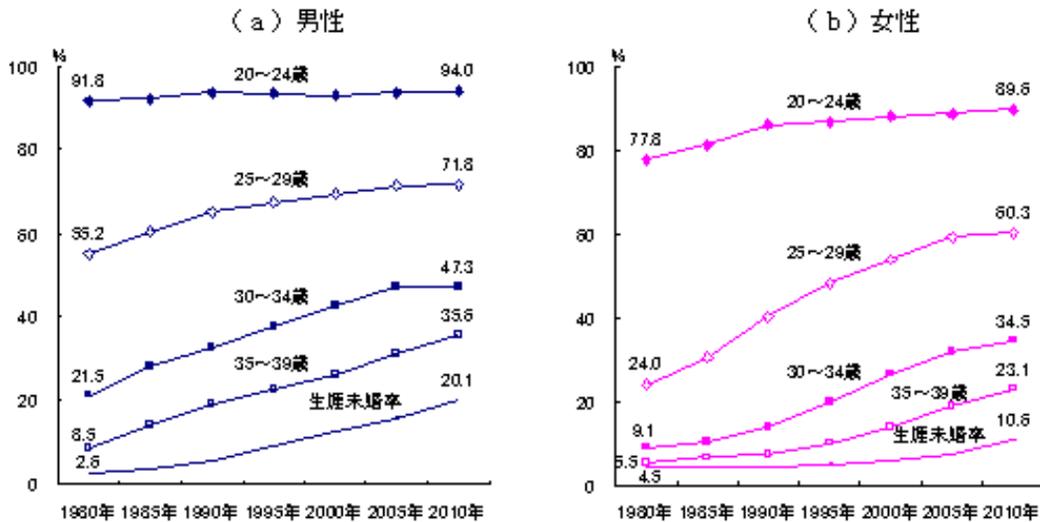
(出典) 内閣府「平成23年度版子ども・子育て白書」から、ニッセイ基礎研究所作成

○30台前半で男性の約半数、女性でも3人に1人が未婚。生涯未婚率も上昇し、男性の5人に1人、女性の10人に1人は生涯未婚という状況

○2011年の合計特殊出生率は1.39、出生数は過去最低の105万人

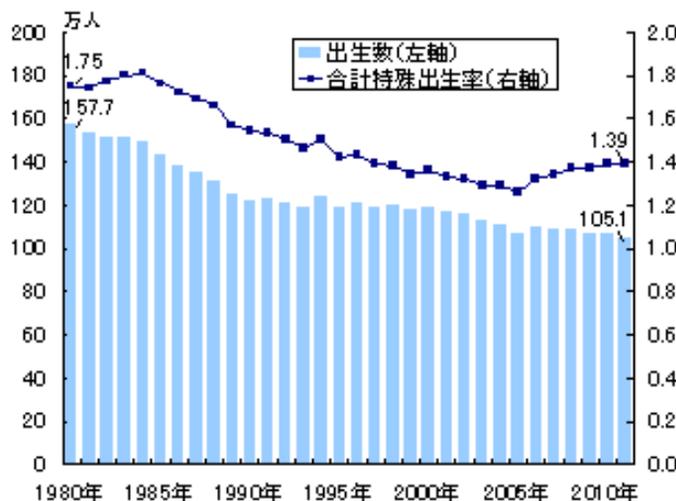
※合計特殊出生率は2006年頃から上昇しているが、人口規模の大きな団塊ジュニア世代が30代後半となり駆け込み出産が増えた影響などがあり、今後は低下することが予想される

20代・30代の未婚率の推移（1980年～2010年）



(出典) 国立社会保障・人口問題研究所「人口統計資料集」から、ニッセイ基礎研究所作成

出生数および合計特殊出生率の推移



(出典) 厚生労働省「平成23年人口動態統計」から、ニッセイ基礎研究所作成

○20歳代の専業主婦志向は高まっており、2008年で約48%と、はじめて全体を上回る

夫は外で働き、妻は専業主婦と考える人の割合



(出典) 国立社会保障・人口問題研究所「第4回全国家庭動向調査」

③ 関西財界セミナーにおける若者の声

1. 活かす

SNSは我々の強みだ

学生の声

- 今の若者はSNSなどを利用して人的ネットワークを拡げることが容易になった。これは今の若者の強みだと思う。(桃山学院・2年)
- SNSの普及(特にFacebook)によって、小学校や中学校時代の友達との関わりが増えてきたように思います。こういったことで再びコミュニケーションをとったりすることで地元で集まったり大切に想ったり、といった若者が増えていると改めて思いました。(桃山学院・2年)
- SNSは画期的なコミュニケーションツールとしての側面がある。特に効果があるのは普段あまり話さない人との繋がりがだと思えます。そういう人といきなり会うとなったら幅2メートルの川をジャンプするくらいの思い切りが必要だが、TWITTERでの会話はそれを緩和する飛び石になったりする。(大阪大・4年)
- LINEは、若者にとっても強烈なインパクトのある変化でした。ID交換も簡単で、また共通の話題を持つグループが簡単に作れるようになって、コミュニケーションの幅が数倍、数十倍になりました。(大阪大・4年)
- スマホの普及などによりSNSが発展し、その影響で若者のコミュニケーション能力が低下したとよく言われていますが、そうではないとおもいます。若者にとってSNSはコミュニケーションを拡げる手段として利用しているとおもいます。その点では今の若者はさらに高度なコミュニケーション能力が求められているように感じます。(桃山学院・2年)
- (こんな声も)
- SNSによって縛られる環境は疲れる。知らなくてもいい情報も入って来ってしまう。見つけられてしまう。どこにいても一人でいる感覚がない。(白百合大・3年)
- SNSが発展して便利になったけど、誰かと繋がってしまっているのが気を使うのに疲れる時がある。自分のツイートをどの知り合いに見られているか分からない、という不安からツイートを非公開に設定している若者も多いです。(早稲田・1年)
- 過保護なシステムによって、私たちは「つながり方」を知らなくなったような気がします。自分の能力がどこにつながるか、リアルな世界(SNSではなく)で異質な分野の人とどうつながるのか、多くの若い世代は知らないし、欲してもいない。(立命館大・院2年)
- 情報があふれすぎて、学生が自分から集めようとしなくなる傾向があるのは実感します。(京都府立大・3年)

1. 活かす

安く買って、個性を出したい

学生の声

- いまの若者は古着文化とともに育っているという点もあると思います。
90年代にはいり、3R政策やファッション史でもハイブランドへの憧れや逆にファストファッションなどの台頭などがおこり、ハイブランドを買いたいけどお金がないから買えないので安く買えたほうがラッキーだし、探せばあるのが当たり前。さらにはファストファッションはださく見えなきゃオッケーという価値観が若者にはあると思います。
昔は古着は貧乏な人が着る服という価値観があったとは思いますが、今は違うと思います。
(慶応大・2年)
- いまの若者は、ブランドよりも機能性重視のように感じます。
それがものを長くつかっていたりする理由にもつながるのではないのでしょうか。
(同志社大・4年)
- 車についてかつては「いずれはクラウン」と言われていたそうですが、
現在、軽自動車が人気です。
維持費も安いし燃費もいいし。車はステータスではなく、あくまで交通手段となっていると感じます。(京都府立大・3年)
- 不況であるから、節約して安いものを買うといった考えは全くありません。
安くても良いものを買えた時の満足感はとても感じますし、それ以上の価値は求めていない、それが最高のものだという考えもあると思います。(桃山学院・2年)
- 僕は普段お金を全然使いません。服も食べ物も遊びも身の丈でいい。(早稲田大・2年)
- (こんな声も)
- 海外へ行きたい、車を買いたい、家を買いたいといった憧れ自体は強く持っていると思います。
しかし、若者の所得では実現が難しいため小さな社会でも満足できるように社会に順応しているだけだと思います。意欲や夢は強くもっているのではないのでしょうか。
(桃山学院・2年)
- 今の若者は自分を俯瞰する傾向があると感じます。
「理由なんか、ない。好きだから好き！」ではなく、
「(アイドル好きじゃないのに)あえてAKBを好きになる自分って、一周回って良いやろ？」
といった感じです。(大阪大・4年)

1. 活かす

好きな分野で成長したい

学生の声

- 私の周りの人はなにかしらの価値（自身が経験した良さ）を周囲に伝えたいとか、形として残したいという気持ちは多くの人が持っています。その範囲のため（悪く言えば、だけ）には成長したいと言う人はすごく多いです。（同志社大・2年）
 - 今の若者は自分のまわりのコミュニティを大事にする傾向があり、その上で結婚や出産により自由な時間に制限がかかるよりも、友達といたり、好きなことをやっていたいと思う人が多いと思う。（慶応大・2年）
 - 現在、自分の好きなことを行って生涯やりくりしている人が増えているロールモデルをたくさんSNSなどで見ることにより、企業に入ることが、昔よりもより一つの選択肢になりつつあり、『スキルアップ』の意味が人によって方向が多様化していると思います。（同志社大・2年）
 - 自分のできることを、したいことをさせていただけることは本当にいいことだと思います。若者は「やってみる」企業は「やらしてみる」このような風潮を今、拡げるべきだとおもう。（桃山学院・2年）
 - 大学生としては自由な生活の中、選択肢が増えた中、好きなことを選択していく上で、好きなこと以外は「食わず嫌い」になっていると思います。そこが、好きなこと以外のことをやるのがいやになりモチベーション低下につながると思います。（同志社大・2年）
 - それぞれに進みたい方向や要求しているものは違います。何か決められた方向への進ませる直線の成長ではなく、それぞれが進みたい方向に進む、村社会の円の拡大が成長の仕方だと思います。（同志社大・2年）
- （こんな声も）
- 起業家＝お金持ち、自由というイメージがあったと思う。より多くの自由時間を、起業して好きな仲間とだけ仕事をやりたい、そんな若者の甘さが「ミッションのない起業」につながっているのだと思う。（佛教大・2年）
 - 若者は「自分に合った仕事」を決めつけているように感じる。例えば「自分は人と話すことが苦手だから事務職でないと駄目だ。」などと決め込んでいるように感じた。（同志社大・4年）

1. 活かす

任せてほしい

学生の声

- 「任せる」ことに大賛成です。
大きな責任を任せてもらえたときに、やりがいを感じると思います。
自分たちで懸命に取り組むからこそ、本質的な面白さを感じられると思います。
(大阪大・4年)
- 託される、任されたら、認められたいだったり、自信がつくのでさらなる成長意欲を高めると思います。(早稲田大・1年)
- 若者に「任す」ということが若者を「活かす」ということにつながると感じます。
(京都府立大・3年)
- 仕事や責任を持たせるとしっかりとできる学生はたくさんいると思います。
(京都府立大・3年)
- 「託す」「任せる」こういうものを初期教育で作るのは大賛成です。我々世代は過保護に育てられすぎていると思います。(大阪大・4年)

1. 活かす

競争は嫌だ

学生の声

- 順位的なものではなく、本質的なものを大事にするという傾向があるのは、おっしゃるとおりだと思います。
今までの上の世代の方々が目指して来たものを目指しつつ、スタンスが違うだけな気がします。（慶応大・2年）
 - 現在の教育は、打たれ弱い若者をつくりだしてしまっています。
幼稚園の発表会でお姫様が何人もいたり、運動会で走っても順番をつけなかったりと、幼い頃から私達は周りと差をつけられない教育をうけてきました。（同志社大・4年）
 - 小中高と一環して競争させない教育を受けて来たわたしたちにとっては
教育システムによって価値観がつくられてきたという観点は大きいと思います。
（慶応大・2年）
 - 若者が、教育を受けてきた過程において過保護であったことが起業できない最大の要因であると思う。「やってみなはれ」と言われ、手を離された瞬間、不安に陥ってしまう若者が多いのだと思う。（佛教大・2年）
 - 起業をするような「意識高い学生」を揶揄しからかう風潮が存在する。（大阪大・4年）
- （こんな声も）
- 積極的に起業をしたり、競争に打ち勝っていこうという気概を持った若者も多くいます。
（佛教大・2年）
 - 成長意欲、やりがい、上昇志向を求める若者はたくさんいます。
若者の中でも、それを求めて努力する人／「どうせ無理だろ」と諦めてしまう人に分かれるように感じます。
勉強以外にとことん打ち込んだ経験があるかないかも関係するのではないかと考えます。
（大阪大・4年）

2. 支える

リアルな体験がしたい

学生の声

- リアルな情報、本当にそれが私たちの欲しいものだと思います。
いかに私たちが持っている情報が勘違いであったり、嘘であったり、また隠れた良い情報があったり・・・ということを知らなかったことを痛感しました。（京都府立大・2年）

- 学生が行動に移さないのは実体験がないからです。社会と接した経験が少なすぎる。
（京都府立大・3年）

- 私たちは「今のリアル」を知らないなあと感じました。
働き方であったり、選択肢であったり、それぞれの企業の本当の思いを知らないと、いつまでも「あれはあかん、変えなあかん。」のままだと思います。（京都府立大・2年）

- 社会に出たときにギャップを感じるのは、「体験」だけで終わっているからではないだろうか。
そこにお金に関わってくる経験をしたときに「リアル」な社会を体験、そして社会に関われることが出来、（将来に）備えられるのではないだろうか。
（京都府立大・2年）

- SNSなどで知っている気にはなりますが、教えることではなかなか今は私たちには意欲がわからないので、できるだけ共感や体験として学びを得るような機会が増えると良い。
（同志社大・2年）

- ギャップイヤー制度はとてもいいと思います。
この制度があれば留学へ行く機会が増え、ボランティアなどに参加する時間も増え自らの経験を増やしていくこともできる。（桃山学院・2年）

2. 支える

(リアルな体験で)働くイメージを得たい

学生の声

- 旧来のお客様型のインターンシップ廃止に賛成です。私もインターンに参加したことがありますが、完全におもてなしを受けていて、結局あまり事業の中身が見えずに卒業したのではないかというもやもやが残っています。
大学生は、お客様でも、もう子供でもないと思いますし、本物の体験をさせていただけるようなインターンを、企業の皆様と協力してやらせてほしい。(立命館大・院2年)
 - インターンシップはしよう！とよく言われますが、一步間違えるとお手伝いさん状態になってしまいます。(京都府立大・2年)
 - 三回生になっていきなり就活となるとやはり働くという想像がしにくいし、短期間の間に自分が将来働く場が決まることに戸惑う人も出てくる。インターンシップ等大学側がより積極的に取り入れる、そういう環境づくりがもっと進むといいと思う。
(京都府立大・3年)
 - 働く場、実践の場に入ることによって、自分の「出来ること」、社会に対して「貢献出来ること」が分かってくるのではないかと、思います。(京都府立大・2年)
 - 就職活動は見える、見る範囲が狭過ぎることも問題のように感じます。名前を聞いたことがなくても業績のいい企業はたくさんあります。そういった企業と出会える機会が増えればミスマッチが解消される気がします。(早稲田大・1年)
 - 将来何がしたいのか、今、何をすべきかを早い段階から考えさせ、キャリア教育の仕組みづくりを進めるべきです。(同志社大・4年)
- (こんな声も)
- リアルな情報を理解すれば、就職活動で「型にはまっていく若者」も減り、自分のできることをやる、という風潮になるのかもしれない、と感じました。
(大阪大・4年)
 - インターンなどの実践一辺倒になるには危険だと思いました。外の競争力ある大学の学生は、皆大学の学問にも全力であると聞いています。(同志社大・4年)

2. 支える

失敗した時のセーフティネットがほしい

学生の声

- いま、一度敗者と見られた人は本当に生きていきにくい環境だと思う。
敗者復活そんな環境が整えられればそこからまたがんばろうという気持ちになると思う。
落ちていってしまう人が減ると思う。（白百合大・3年）
 - 今の日本には、失敗できる環境がないと思います。
「失敗するならば、だめ」と言われることが多いと思います。ですが、チャレンジして失敗して学ぶことは大きい場合もあると感じます。
できる可能性よりも、失敗するリスクを重視しすぎて、大きな発展のチャンスを逃していることもあると思います。（大阪大・4年）
 - 外に出る、一步踏み出すきっかけ、後押しするもの、失敗してもやり直せる機会があればチャンスが増える。（京都府立大・3年）
 - リスクも取れて、もっと大きなビジネスをつくることのできる仕組みがつくれたらと思います。（立命館大・院2年）
 - リスクをとって失敗しても支えてくれるスポンサーがいれば、たくさんの人がいろんなことに挑戦していくと思います。（同志社大・1年）
 - 若者は、なにか行動を起こすとき、多くの人がリスクを先に考えてしまい行動を躊躇してしまいがちだと思います。（桃山学院・4年）
 - 自分のしたいことに向かって猛進していく際、していくための土台をつくってくれた家族という要素を抜きに考えてしまうと、挫折が怖くなる。（京都府立大・2年）
 - 小さい頃から過保護に育てられた私は、いまだに誰かに守ってもらおうと考えていて、社会に出ても守ってもらいたい欲が強くある。（同志社大・1年）
- （こんな声も）
- いまの日本の就職活動のシステムや社会の状況などが、リスクをとるという舵をきれない理由になっていると思います。（慶応大・2年）
 - 起業で失敗したときには大きなリスクがかかる。成功した起業者はカッコイイとを感じるが、それ以上に失敗したときのリスクの不安が勝ってしまう。（桃山学院・2年）

2. 支える

社会人・経営者とつながりたい

学生の声

- 私たち若者は、成長したいという意識を持っている。
しかし、行動の起し方がわからなかったり、1歩踏み出せなかったりしているのが現状であると思う。私は大人の方々と、もっと強いつながりを持ちたい。
そして、学生に対する「支援」だけでなく、考えの甘さを叱って頂いたり、我々の意見に対して、しっかりとしたフィードバックをして下さる大人の繋がりがほしい。
(佛教大・2年)
- 日頃、社会人や経営者の方々と接する機会はあまりありません。逆に、接する機会があるとこんなにも多くのことが学べるのかと驚きました。(京都市立大・3年)
- 経営者の方が考えていることを生の声で、face to faceで話したことで、多くのことを吸収できたように感じます。このような場を増やすことに賛成します。
(同志社大・4年)
- 私たちに足りないのはもしかしたら「チャンスを掴む能力」かもしれません。
(経営者など) 様々な人と関わっていたら、自然と自分のアンテナにひっかかることが出てきているはずです。(立命館大・院2年)
- ぬるま湯に浸かっている意識を私は持っているし、それに対する大きな危機感も持っている。だからこそ、積極的に他大学の学生や大人と交流を持ち、自身の知見を上げたいと思っている。大人の方には経営者の方と学生が関われる多くの機会を作って頂きたい。(同志社大・1年)
- 耳を傾けつつも、間違っていたとしたらしっかり言っていただけるような大人がまわりにもっと増えてほしいと思います。(慶応大・2年)
- (こんな声も)
- お尻を叩いて奮い立てられるそんな経験が少ない若者だけだと思う。そんなことをしてくれる大人がいるかいないかで若者の意識的な問題で二極化してしまっている。
(白百合大・3年)
- 大学には特別講義などで、経営者の方々が訪れることも多いです。
しかし、フリーターの友人からは、経営者の方々とお話をする機会は滅多にないと聞きます。非大卒者にも同じように、方々からお話を伺う機会が設けられることが望ましく感じます。
そうすることで若者全体のパワーもついていくのではないかと感じます。(大阪大・4年)

3. 伸ばす

競争力を生む教育にしてほしい

学生の声

- 現在の日本の教育は知識詰め込み型の教育が大半で、詰め込んだ知識や自分の意見をアウトプットする機会が少ないと思います。自分自身について考える時間がない。そもそも就活で初めて自己分析をすること自体おかしい気がします。大学の授業をディスカッション形式にして、学生の発言力やリーダーシップ力を鍛え、企業インターンシップも積極的に採用するなど実社会に適応出来る人材育成が必要。（同志社大・4年）
 - 「競争で勝ったほうがカッコいい」という教育がないのが問題、日本の起業に関する問題の本質は、まさにそれだと思います。（大阪大・4年）
 - 大学内で企画力や行動力を付けることが、社会で活躍するための準備になると思う。（佛教大・2年）
 - 大学で就職のサポートは盛んに行なわれているように感じるが、起業のサポートはほとんどないように感じる。例えば、大学内に起業を目指す若者のためのオフィスを完備する。そういった取り組みをもっと広めるべきではないだろうか。（桃山学院・2年）
 - 起業しようと思う人をしっかりと応援する制度や大学で起業を経験した方の話（成功例、失敗例）を聞けるような講演、授業などを設置するべきではないかと思う。（慶応大・1年）
- （こんな声も）
- 勉強だけでなく、様々な能力を発揮する場を与えて欲しいです。生徒が主体的に何かに打ち込み失敗して学ぶ経験や、かけがえのないやりがいを感じ、一生懸命に取り組むことの大切さを学ぶ経験が必要と感じます。その中で、自分自身の得意不得意を認識したり、自信もつくと感じます。現在はより「人間力」が求められる時代ではないでしょうか。教育プログラムも人間力を育てる取り組みが必要と考えます。（大阪大・4年）
 - 強い意志を持った、尖った人は避けられる風潮があります。アツい人を良しとしない風潮。このような風潮が強い意志の形成を阻害していると感じます。大学という場だけで解決を図るのでなく、小中高の教育から見直す必要があると感じます。（京都府立大・3年）
 - 企業の方々には、我々が挑戦できるきっかけを作って頂けたら（在学、新卒問わず）本当の意味での学びになると思います。（同志社大・4年）

3. 伸ばす

一步先、外の世界を見たい

学生の声

- 「今あるものよりも先にある幸せ」ぜひ見たいです！
現代の日本において、将来のビジョンが見えず、進みべき道がわからない若者はたくさんいると思います。若者がこれを意識し、理解すれば野心的な、活動的な若者が増えると思います。（京都府立大・3年）
- 企業側から若者支援という形で、海外研修などがあれば魅力的だと感じます。
また、そのチャンスを多くの若者がつかめるように、広報に力を入れてもらうことも魅力的だと感じます。（大阪大・4年）
- 今後いきなり環境が悪くなる可能性もあるということを自覚して、発展途上国など外を見ることで日本の若者の根本的な考えを変えていくことは必要だと思いました。（同志社大・2年）
- 以前自分がタイに行って若者と接した時に、将来やビジネスに対する全く異なる価値観と出会い刺激を受けました。
国外旅行ではただ観光するだけでなく、アジア各国のエネルギッシュな若者と触れ合える機会がもっと多くの学生に用意されると良いと思います。（早稲田大・1年）
- 発展途上国の「豊かになりたい」という意欲を実際に見ることはとても重要だと思います。
私は昨年ベトナムに行ったのですが、学生・社会人問わず「日本のように豊かになりたい」と一生懸命に日本語を学ぶ姿に感銘を受けました。
私たち日本の学生はこのままではいけない。（京都府立大・3年）
- そとから日本がどう見られているか。マレーシアがかつてとった Look East政策などを見ればよくわかります。まだまだ日本は憧れです。
憧れられてるわたしたちが現状で呑気にいていいとは思いません。
そういった感覚を、外を見ることで養うべきだと思います。（慶応大・2年）
- 日本のよさ、悪さを感じるためにも発展途上国などの国をみることは自分の視野や価値観をひろげるきっかけになると思います。（同志社大・4年）
- 「外をみる」という意見に共感いたします。
日本の若者はがむしゃらにならなくても生きていけるため、無理にがんばってリスクを負うぐらいなら現状維持で良いや、という考えがあるかと思います。
ですので、外をもっと広くみること、活力につながるのではないかと思います。（桃山学院・4年）

3. 伸ばす

就職活動制度を新しくしてほしい

学生の声

- ギャップイヤー制度はとても良いと思います。私の通うキャンパスは Semester 制をとっており、9月卒業が可能なので、わざと卒業を半年遅らせて、就職までの半年間、海外へいったり、インターンをする人もたくさんいます。企業と大学が協力して、この制度が一般的なものになれば大学と社会のギャップは埋まるのではないかと思います。（慶応大・2年）
- ギャップイヤーの考え方は賛成です。なぜ、（新卒採用で失敗したら）取り返せないかと言うと大企業しかみてないからです。なので地方で農業とアートをやるプロジェクトも、大企業以外を見るきっかけになっていいな、と思いました。（早稲田大・2年）
- 新卒一括採用というシステムが就職の際にプレッシャーになっている部分がある。年功序列という長期雇用をとっている企業が多いことによって、新卒一括採用を変えることは難しいかもしれないが、これを変えないと就職困難は変わらないと思う。（京都府立大・3年）
- 採用システム、通年制がいいと思います。色々なメリットが有るのですが、「上質な学生が集まる」という面が最も大きいです。通年採用をしている企業は就活生からも一目置かれています。時代がシフトしていています。もはや新卒一括採用にメリットは少ない気がします。（大阪大・4年）
- 受けたいときに受けられるという採用方法はとても良いなあとと思いました。学生生活中は学業に専念し、卒業して自分の専門知識を持ったうえで海外留学をし、その後やりたい仕事により明確になり、就職活動に移せるからです。（同志社大・1年）
- 昨夏にタイに行き、就職は大学卒業してからだというお話を伺い大変驚いた。グローバル化を目指すならまず就職活動の方法を根本から変える必要があると思う。（慶応大・1年）

（こんな声も）
- 現在の新卒一括採用制度に関して問題点も多々ありますが良い面もあると考えます。3年生の12月で一斉に就職活動が始まりますが、それまでは自分の将来を真剣に考えるという学生は少ないように感じます。学生に将来を考えさせるという意味で、現在の制度は有効に機能している面もあると感じます。（京都府立大・3年）
- 就職活動を卒業後に行うという考えには反対です。むしろ大学のテストなどを早い時期に行うなど就職活動の妨げになることを改善する方が優先すべきだと思います。（同志社大・4年）
- いつでも採用試験が受けられる。これは若者が二極化すると思う。遊びたい人、遊べる環境にいる人は遊び続けるのではないかと思います。（白百合大・3年）

3. 伸ばす

雇用制度を新しくしてほしい

学生の声

- 雇用を守る「制度」、雇用を作る「起業」どちらも若者だけの問題ではなく、日本において急務な課題である。いろいろな働き方、選択肢を増やすこと、そのためには雇用制度根本的に変えていかなければならない。（同志社大・4年）
 - 現代の雇用制度に是非を問わずに新しい形にすればいいと思います。
多様なライフスタイルがあるならば、企業も多様な雇用制度を用いていいでしょうし、日本ならではの雇用スタイルをつくるべきでしょう。（立命館大・院2年）
 - 業種、業態に合った制度があれば雇用流動性や採用などの問題を打破出来る気がします。（早稲田大・1年）
 - 非正規雇用を仕組みとして取り込んでいくという御意見に賛成です。
「雇用形態のデザイン」という言葉がとても印象に残りました。多様性と効率の良さを追求していくのが大切であると思います。（佛教大・2年）
 - （子供を生む）女性側からしてみたら、生もうと思っても会社に再復帰しづらい環境制度であったり、雰囲気であったり）のため、生みたくても生もうと思えない。（京都府立大・2年）
- （こんな声も）
- 現状まだまだ新卒一括採用が主要であるし、学歴、年齢差別と言っては言いすぎだが、そういった風潮が残っているのは事実。（京都府立大・3年）
 - 非正規雇用や終身雇用を非と捉える風潮は感じます。企業や業態によって多様なシステムが必要だ、という経営者ならではの視点はすごく勉強になります。
しかし、終身雇用など従来の日本式システムの負の側面が解消されていないのも事実であり、その影響をくらっているのは我々世代が多いのではないのでしょうか。（同志社大・4年）
 - 解雇要件等、規制緩和をするだけでなく、労働者が安心して働くことのできる仕組みを構築することを忘れてはいけません。（京都府立大・3年）

3. 伸ばす

起業できる環境を整えてほしい

学生の声

- 社内ベンチャーをもっと増やしてほしいです。私は今後就職先でやりたいことをやれそうであればそこでやりたいし、無理そうであれば起業を考えています。（同志社大・4年）
 - 企業内起業にはとても興味があります。起業をするのはリスクーだと感じますが、どこに就職しようとする上で、そのような会社に興味を抱いたりもします。（慶応大・2年）
 - 企業に属してから、起業できるほどの力量をつけて、独立できる制度を充実させてほしい。（慶応大・2年）
 - 起業で失敗しても敗者復活戦や保険があればリスクに対する恐怖感が軽減出来ると思う。（早稲田大・1年）
 - 起業者と触れ合う場、経営者と交流する場が増えることで、起業意識が高まるきっかけになる。（京都府立大・3年）
 - 子育てが終わり自分の時間ができたので起業したい、という女性とお話させて頂きました。ですが、社会経験のある周囲の人々は「そんなに甘くない」と言う。子育てに時間を費やしてきた女性たちが、活躍できるような支援もあって欲しいと感じました。（大阪大・4年）
 - 女性でなければ生まれない発想などもあると思います。女性の起業を促進する取り組みがあれば、女性の活躍できる場が増え、女性の発想を活かした新たなビジネスも生まれるのではないかと考えます。（大阪大・4年）
- （こんな声も）
- 本当にリスクをおかしてチャレンジさせてくれる会社って多いのか？という疑問は少し残ります。若者の中には、そういったイメージもあると思います。（大阪大・4年）
 - 就職してから、起業する方が日本には合っている。学生には限界がある。ならば100年以上続いた企業に就職し、その後起業する方が視野広がるし、社会の仕組みを学べそう。日本でもベンチャーで世間で知られている企業も上のような流れな気がする。（慶応大・1年）
 - アメリカのトップ大学の多くは起業する。日本のトップ大学の多くは大企業に就職する。日本の起業家に対する“出る杭を打つ”風土が根を張っているのが原因。（同志社大・4年）
 - 日本は「はじめてのおつかい」消費側、あるいは被雇用者側から始まる。米国は「はじめてのレモネード屋さん」生産側、あるいは雇用する側から始まる。こんなところから始まっているのでは、と少しばかり。（大阪大・4年）